

【月光を継ぐもの】

月影(つきかげ)

青十郎(せいじゅうろう)

紅葉(くれは)

綾姫(あやひめ)

衣伏(いぶき)

緋炎(ひえん)

楓(かえで)

影 5〜6人

幕開け前。真つ暗な中、親子の会話が聞こえる。

娘 ねえ、お母さん。

母 何？

娘 寝る前に何かお話して。

母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母 娘 母

いいわよ。何か絵本持つてくる？

ううん。初めて聞くお話がいい。

初めて？

だって他のお話は飽きちゃったんだもん。

と、言われてもすぐ出来るお話なんて……あ。

何かある？

あるにはあるけど、寝る前に聞くようなお話じゃないわね。

どうして？

少しね、悲しいお話なの。

悲しいお話……。

少しだけ、でも深く悲しいお話。……やめる？

ううん。そのお話が聞きたい。

そう。じゃあ……何から話せばいいかしら。これはね、自分の信念を貫くために自分の存在を賭

けた、3人の男の人のお話……。

音楽。幕が上がる。舞台は真つ暗。

曲の盛り上がりと同時に明かりがつく。月影と青十郎と紅葉が剣を交えている。

紅葉 戯れ言を言うな……。弱き者の気持ち貴様等に分かるというのか？

月影 皮肉なもんでな。弱き者の気持ちはアンタが教えてくれたよ！！

青十郎 だからこそ俺達は強くなろうと思った！！痛みや苦しみを飲みこんで、さらに前へ進もうと思ったのだ！！

月影 死からは何も生まれぬ。俺達は生きてるんだ！！生きてりゃ辛いことの1つや2つあるだろう、

だがな、辛いことだけじゃない。嬉しいことや楽しいことだっていっぱいある！！

青十郎 可能性を潰して前を見なくなった貴様に俺達が負けるわけがないだろう！！

3人、半周して離れる。上手に紅葉。下手に月影と青十郎。

相対し、3人再度構える。3人の雄叫び。

曲の盛り上がりと同時に暗転。紅葉は下手へはける。

月影は下手側へ、青十郎は上手側へ移動。

青十郎の台詞の途中で明かりがつく。

青十郎 だから俺は貴様が嫌いなんだ！

月影 この位のこと目くじら立てるなよ、小つちえー男だな！

青十郎 原因を作った貴様に言われたくないわ！

月影 あんなトコにいつまでも置いとくアンタが悪いんだろーが！

青十郎

月影

青十郎

月影

青十郎

月影

青十郎

月影

青十郎

月影

青十郎

月影

おーおー、言うにコトかいて俺が悪いときたか。流石身分の低い人間は知識も知能も低いな。

アンタは何かつつーとそれだな。身分つて粹でしか他人を見れないのかよ！

問題のすり替えか!?!今話しているのはそついうことじゃないだろう！

しつこいな!だから皆から小つちえーつて言われるんだよ。

皆つて誰だ。

皆は皆だよ。

ここには姫と楓殿と俺達しかいないだろ！

だから、皆だよ。

姫や楓殿が言っているのか!?!

小つちえーつて。

嘘をつくな!貴様、そこへなおれ!叩き斬ってくれる!

やるつてのか!?!手加減しねーぞ。

二人、刀を抜き睨み合う。

月影

青十郎

月影

どうした。抜くのはそつちの刀じゃなくていいのか?

馬鹿を言うな。貴様ごときに殿からお預かりした大事なこの刀を抜けるわけがなからう。

俺とやり合うんだ。そのくらの条件はくれてやる。

青十郎 貴様こそコレを取らなくていいのか？

青十郎、自分の頭を指しながらセリフを言う。

青十郎 俺と真剣でやり合っならあやかしの力くらい借りないことには勝負にならんだらう？

月影 弱い奴ほどよく吠えるってな。現実を見せてやる。

青十郎 行くぞ！

二人、相手へ走り出そうとしたとき、楓が入ってくる。

楓 お止め下さい二人とも！どうしたんです！？

月影 楓殿！コイツがからんでくるんです！

青十郎 原因を作ったのは貴様だろぅが！

月影 そのらのガキだつてもっと諦めいいぞ。

青十郎 だ、か、ら、貴様が言うな！

楓 お止め下さい。青十郎様、どうなすつたんです？

青十郎 まんじゆうだ。

楓 はい？

青十郎 俺が訓練後に食べようと思っていたまんじゅうをコイツが食ったんだ！

楓 まんじゅう。

月影 2個な、2個。

青十郎 まんじゅうは3個しかなかったんだ！そんなわけでこいつに人の道を説いていたというわけです。

楓 (ボソッと)コイツ、小っちえー。

月影 なっ!?! なっ!?!

青十郎 楓殿！

楓 まあ、良いではありませんか。月影様も全部食べてしまったわけではございませんし。お腹がすいていたのでしよつ。

青十郎 姫や楓殿がそうやって甘やかすからいけないんです。忍のような身分の低い連中は厳しく躾けなくては！

楓 青十郎様。姫様はそのような物言い、好きではありません。

青十郎 しかし！

月影 分かった、分かった、そんなに言うなら戻してやる。だから楓殿にあたるな。秘儀、忍法、食べ戻しの術！

月影、青十郎の服にめがけて

月影 エレエレレ。

青十郎 それは忍法じゃないだろう！ここまで侮辱されたとあつては後へ引けん！貴様、覚悟！

青十郎、再び刀を抜く。それに合わせて月影も抜く。

楓 お止め下さい！今日は姫様が封印の間に入って30日目。出てこられる日なのですよ！

二人、その言葉を聞いて刀を鞘に収めながら

青十郎 おお、そつであつた。

月影 もうすぐ出てくる時間だよな？青十郎、今何時か分かるか？

青十郎 軽々しく人の名前を呼び捨てにするな！

月影 ……アンタは真面目だねえ……。

青十郎 貴様がふざけすぎなだけだ。

楓 いい加減にしてください二人とも。

中割が開いて、綾姫がフラフラと入ってくる。綾姫はトランス状態になっている。

楓

ああ！ 姫が出てまいりました。私、冷たいおしぼりを持ってきます。青十郎様、月影様、しばらく姫様をお願いします。

楓、上手へ走り去る。

青十郎、姫に近付き手を出そうとするが、恐れ多くて姫を支えることができない。姫、フラフラと2・3歩前進し、大きくバランスを崩す。

走り寄り抱きとめる月影。それを見た青十郎、月影の手をつねりながら

青十郎

貴様――忍の分際で姫のお体に触れるとは何事か！

月影

いててててて――いてーよ――

青十郎

主君に仕える身として、それ位のこととはわきまえておけ！

月影

そんなこと言ったってあのままじゃ怪我してただろ！ っていうか、痛てーっつーの！

青十郎

貴様がいつまでも姫に触れているからだ。

月影

分かったよ。離しやいーんだろ、離しや。

月影、姫を離す。再びフラフラする姫。

月影

どーすんだよ、支えないと危ないぞ。

姫、大きくバランスを崩す。とっさに片手が出てしまう青十郎。

青十郎

申し訳ございません姫！この青十郎、決してやましい気持ちでお体に触れているわけではございませんーどうか、どうかご容赦の程を！

月影

青十郎、こついう時は必死に言い訳すればする程、怪しまれるぞ。

青十郎

やかましい！本来なら我々など決して触れてはならんお方なのだ！しかし、危ないものを見過ごすことは出来ないのも事実！しかし手は触れてはならんだ！クソッ！どうすれば、どうすればよいのだ！ハッ！そうか、手は触れてはならん、ならばこつだ！

青十郎、手を離し、片足で姫を支える。

月影

お前、絶対間違ってるだろ！

青十郎

やかましい！均衡がとりにくいんだ！貴様も協力しろ！

月影

……足でか？

青十郎

手で触れることは許さん！

月影

アンタの作法の基準がわからない……。

月影、片足で姫を支える。苦しそうな姫。

青十郎

姫！どうしました姫！

綾姫

……座りたい。

青十郎

分かりました！座って休みたいのですね！おい！いいか、ゆっくりだぞ！

月影

せーので、動くか。

月・青

せーの……。

二人、呼吸を合わせて座ろうとした時楓が入ってくる。

楓

何してるんですか！？

二人、驚いて支えていた足を離してしまう。崩れる綾姫。

楓

姫様！姫様！大丈夫ですか！……さ、これを。

楓、冷たいおしぼりで姫の顔を拭ってやる。同時に飲み物を渡す。一息つく綾姫。

綾姫

「ご苦労様です。楓、青十郎、月影、変わりはありませんか？」

楓

はい。皆変わらず元気です。

綾姫

そうですか、それは何よりです。

楓

姫様、我々の心配よりも御自身の事をお考えになってください。

綾姫

私は大丈夫。いつものことですもの。

青十郎、綾姫の近くまで歩み寄り、ポーズを決める。

青十郎

姫！お役目お疲れ様でございます。

綾姫

青十郎、変わらず律儀ですね。

青十郎

私は姫を守る為にここにいます。しかし、それは義理で行っているわけではありません。私は今この場にいられることを誇りに思っているのです。おい！貴様も姫に忠誠の誓いをたてろ。

月影

俺が？

青十郎

たまには貴様にもそれらしいことを教えてやらんとな。いいか、この姿勢は三葉の国、君主に仕える忠誠の証だ。本来なら忍なんて身分の低いやつに教えることではないんだが、現状は姫に直接仕えているんだ。そろそろ最低限度の礼儀として教えてやる。

綾姫

青十郎。

青十郎

姫、これだけは譲れません。忍とは本来誰にも会うことなく任務を全うする影の集団。姫と直接

顔を合わせるなどないことなのでございませう。三葉の国は事情が事情ですので致し方ないとして、であれば尚更、コイツには礼節を教え込まねば。

月影 言っておくが俺はそんな形だけの忠誠なんて誓う気はないぞ。

青十郎 なんだと？

月影 そうだろ。そんな姿勢をしたところで本心は分からない。ビシツと決めた心の中で舌を出しているのなら意味はないだろ。

青十郎 舌を出してるだど？

月影 あんたの話じゃない。良くも悪くもアンタはクソ真面目だからな。取る行動に嘘はない。それ位俺だつて分かつてる。ただ、俺は忍だからな、いろんな人間のいろんな顔を知ってるだけだ。

青十郎 お前の気持ちに嘘偽りがないなら問題ないだろつ。

月影 嘘偽りが無いからこそ、知らないやつが作った決まり事に気持ちを乗つけるのが嫌だと言ってるんだ。

青十郎 貴様！

月影 俺にはアンタの行動の方が理解できない。その姿勢を取ることにどんな意味を見いだせるんだよ。意味など必要ない！これが決まりなんだ！命をかけて姫を守ります」という証なんだ！

月影 決まりだとか証だとか、たまにアンタ矛盾したこと言うよな。他人の作った制度に合わせるのか、自分の気持ちに従うのか、ハッキリ定まってないんだろ。軸がブレブレじゃないか。

青十郎 貴様にそこまでの覚悟がないだけだろ！！

月影 俺にだって姫さんの為なら命をかける覚悟はある！

青十郎 忠誠も示せない奴がほざくな！

月影 だから、示すことと実行することは別だって話だろうが！

綾姫 やめなさい2人共！

姫の声にバツと跪く月影と青十郎。

綾姫 言い争いは見たくも聞きたくもありません。自分の思いをぶつけることは良いことですが、相手

を否定することが前提ではその先に発展はないでしょう。それに……

月・青 はっ！

綾姫 軽々しく命をかけて「など誓ってほしくはありません。命をかけるというのは、そんな簡単なこ

とではないのです。役目についている私だって常に責任と逃げ出したい気持ちの間で戦っているのですよ？

青十郎 申し訳ありませんでした。

月影 ……申し訳ありませんでした。

綾姫 何より……そなた達の先に私の命があるなどとは思っていません。私は天命に従います。

月影 姫さん、違う、それは違う。

青十郎 貴様、姫に意見する気か！忍の分際で！

月影

だってそうだろ! あんただってそう思うだろ! 守ろうとしている相手が自分の命が俺達より軽いなんて考えてみる! 守れるものも守り切れないだろうが! 姫さんには自分の命の重さを認識してもらわなきゃこっちがやってられないだろ!

青十郎

姫の御心も分ならず貴様は!

綾姫

良い! ……分かりました。私は私の命を今よりも大切に扱うこととしましょう。ただし、約束なさい。そなた達も決して命を粗末にしないと。極限まで足掻くだけ足掻くと。

月影

……はい。約束致します。

青十郎

もったいなきお言葉。勿論約束致します。

楓

さて、話もまとまったことですし、小さな宴会」を始めますか。

綾姫

そうですね。封印の間に入って30日、それがずっと楽しみでした。

楓

今夜は御馳走です。姫様の好物をたくさんご用意しておりますよ。

4人で上手へ移動しようとした時、上手、下手から影が現れる(理想は5〜6人)

青十郎

コイツらまたか!

月影

ウジャウジャと、どこから湧いて出やがった!?

刀を抜く二人。影と対峙する。

月影 青十郎、油断するなよ！

青十郎 貴様に言われたくないわ！姫を守れ！

二人、影と切り合いをしつつ姫を守る。殺陣をしつつ下手に月影・青十郎・綾姫が移動する。センターに影達。相對する。上手に残される楓。

青十郎 姫！ご無事ですか！？

綾姫 ええ！私は大丈夫です。でも！

月影 ん？なんか忘れてる気がする。

シーンとした間。影達、一斉に上手の楓を見る。

楓 ちよつと！

月影 青十郎何やってんだ！楓殿はアンタの方が近かったろ！

青十郎 俺の役目は姫の護衛だ！姫の無事を最優先する！

月影 姫さんの笑った顔が最優先だろうが！

月影、影達へ斬りかかる。分散する影。影達、月影へ襲いかかる。必死に応戦する月影。後ろからの攻撃に左腕を斬られる月影。体勢を崩す。

青十郎、行きなさい！

綾姫
青十郎

しかし！

綾姫
行きなさい！

綾姫の命令に影達へ突進する青十郎。月影も体制を整え参戦。

一気に影達を斬る月影と青十郎。斬られた影はスーッと上手へ消えていく。

月影
何なんだあいつら。……最近襲ってくる回数が増えたんじゃないか？

青十郎
人ならざるあやかしか……。タチが悪いな。

月影
タチが悪いのはアンタの偏った使命感だ。何で楓殿を守らなかった？

青十郎
俺の役目は姫を守ることだ。

月影
守れるなら目の前にいる全てを守ればいいだろ！？

青十郎
それで万が一が起きたとしたらどうする？ 武士とは使命を全うする者！

月影
楓殿が死んだら姫さんは泣いて生きることになるんだぞ！

青十郎
楓殿も含め姫も俺も弱くはない。貴様とは覚悟が違うんだ！

月影 俺の覚悟が甘いと言っても言うのか!?

楓 月影様。

月影 楓殿。

楓 助けて頂いたのは本当にありがたいと思っています。ですが、今回だけは青十郎様のおっしゃる通りです。この場にいる以上は私の命など無いものと思っています。

月影 生きようとする努力はすべきじゃないのですか？

楓 そうですね。でも、それでも正しいのは青十郎様です。

月影 楓殿！

楓 姫さまがこの世の全ての人の命を預かっていることは分かっていますでしょう？その姫様の命と同じ価値な訳ありません。いいえ、あつてはならないのです。そのことを青十郎様はよくわかっておいてです。先程月影様がおっしゃっていたのもそういうことではないのですか？

月影 それは違う。姫さんが特別なだけだ。それを一緒だというなら……俺には理解できない。

青十郎 だから、それを覚悟の差だと言ったんだ。

綾姫 もうよい。青十郎の覚悟も月影の思いもよく分かりました。ありがたいことだと思っています。ですから、ここに居られる少しの時間だけ、楽しく過ごしたい。それが私の願いです。

青十郎 姫の前で失礼致しました。

綾姫 月影、近くに。

月影 え、あ、はい。

月影、綾姫の近くに移動。

綾姫 怪我は大丈夫ですか？

月影 別に、少し切ったくらいなんで……これくらいは……。

綾姫 身を呈して楓を守ってくれたこと、礼を言います。

綾姫、持っていた手拭いで月影の腕の傷を止血してやる。

青十郎 姫！何を！

綾姫 傷の手当てぐらい私でも出来ます。楓、手拭いをもう一つ。

楓 かしこまりました。

楓、上手へ去る。

青十郎 姫！コイツの血は危険です！こいつは鬼との間に生まれた子ですよ！？その血どんな呪いが掛けられているか。

綾姫 青十郎。私はそのような考え方を好みません。口を慎みなさい。

青十郎

しかし鬼との子であることは事実です！鬼は醜く汚れた存在のあやかしのですよ！？

綾姫

青十郎……鬼がそのような存在であると誰が決めたのですか？

青十郎

それは！

綾姫

人ならざる力を持てばあやかしですか？ならば私もあやかしということになります。私も醜く汚れた存在ということですよ。

青十郎

何をおっしゃいます！私はそのようなつもりで言ったわけではございません！

綾姫

制度や秩序、身分を大切に考える考えは素晴らしいことです。しかし、それだけでは本当に大切なことも見落としてしまいます。

青十郎

姫！

綾姫

もうよい、下がりなさい。

青十郎

私は……。

綾姫

青十郎。

青十郎

……はっ。何かございましたらお呼び下さい。

青十郎、複雑な表情で上手へ去っていく。すれ違いで楓が入ってくる。新しい手拭いを姫に渡す。

綾姫

月影……。青十郎のこと、悪く思わないでください。

月影

いや、俺は気にしてないです、本当。アイツは真つすぐな奴ですから。あいつの言葉に嘘はない。

綾姫

月影

では尚更……。

違うんです。アイツは自分の心の中にある気持ちに気付いてないだけです。小さい頃から黙ってやつは本当にやつかいで……時々俺達を苦しめます。でも青十郎は嘘なく俺としゃべっているんです。本当に醜く汚れた存在だと思ってるなら俺なんて無視すればいい。でも、アイツは嘘なく俺としゃべるんです。

そうですね……。

……俺の方です。

え？

向き合えてないのはきつと俺の方です。

月影が？

忍の里っていうのは嘘だらけです。誰も本当のことを言いません。親も子も友達も恋人も本心を隠して生きています。相手の嘘から本心を読めない忍は上へは行けません。俺は嘘の中で育ってきたんです。だから、青十郎のように素っ裸の言葉をぶつけられると、どうしていいか分からない時があります。本当の意味で向き合えていないのは、きつと俺の方です……。

……そうですね……。

俺も青十郎もこういう性格ですからね、分かりあえる日は来ないかもしれないですけど。

そんなことありません！お二人は立派な武士であり、立派な忍です。お二人が力を合わせれば、三葉の国に怖いものなどありません！

綾姫

さて、暗いお話はここまでにして、明るく行きましょう。私は今日一日を楽しみたいと思っています。小さな宴会の準備は出来ていますか？

楓

もちろんです。

綾姫

月影、新ネタは？

月影

バッチリです。

綾姫

基本的には楽しみにしていますよ。

月影

何すか、基本的って？

綾姫

楓、あなたの役目も今日で最後ですね、ご苦労様でした。こんな何もない辺境の地に90日間も、

楓

さぞ辛かったと思います。

いいえ。いいえ、いいんです。本当はもっと姫様といたいんです。90日なんて決めことがなければ21

綾姫

私はずっとここに居るつもりです。

楓は変わった人ですね。普通ならこんな所一分一秒でもいたくないでしょうに。90日の取り決めはお付きの人の為にあるのですよ？

楓

でも！でも姫様はずっとここに居られるじゃないですか。

綾姫

有難う。楓は優しいですね。この90日はあなたの笑顔のおかげで耐えられました。

楓

もったいないお言葉でございます。

綾姫

だからこそ、今日は代わりのお付きの者と共に楽しみたいと思っています。楓の作る料理は何で

もおいしいですかね。

楓

姫様のお好きなものばかりです。

月影

でも、代わりのお付き役、来るの遅いですね。もう着いていてもおかしくないはずなんですけど。

楓

そういえばそうですねえ……。

下手より緋炎と衣伏が入ってくる。

緋炎

兄者〜！

緋炎、走って月影にジャンプして抱きつく。

月影

緋炎!! お前どうして!!?

緋炎

俺がお付き役の案内を任されたんだ。

月影

お前が？代わりの者はいなかったのか？

緋炎

それが……。

楓

あら？あなたは？

衣伏

衣伏と申します。

楓

お付き役ですか？

衣伏

はい。

楓

でも、私の次はナツメさんのはずでは？

衣伏

ナツメさんは……亡くなりました。

楓

亡くなった!?

緋炎

兄者、今、城内も忍の里も死人が増えてる。誰の仕業なのか分からないけど、何か起きてるのは確かだと思う。

月影

忍の里もやられてるのか!?

緋炎

だから今、守りを固めるために人はさけないってんで、案内役が俺に回ってきたってわけだ。

月影

よく無事に来れたな。

緋炎

別に、特に何もなかったですもんね？

衣伏

ええ。……姫様、そういう訳ですので明日からの90日は私、衣伏がお付き役を務めさせていただきます

綾姫

きます。何なりとお申し付け下さい。

衣伏

そうですか、ご苦労様です。よろしく頼みますよ。

綾姫

はい。

月影

ほら、緋炎。お前も姫さんに挨拶しとけ。

緋炎

俺が!?

月影

そのくらいのお礼儀、里でも習ったろ。姫さん、コイツ、俺の弟分で、緋炎っていうんです。さっき里

綾姫

は嘘ばかりだって話しましたが、コイツだけは別だと思えます。

綾姫

そうですか。緋炎、よろしく頼みますね。

緋炎

……はあ……。

月影

おい「はあ」じゃないだろ。姫さんが話しかけくれたんだ、ちゃんと返事ぐらいしろよ。

緋炎

だって綾姫様だろ！？城が大変な時にほっほり出して遊びまわってるって噂聞してるんだ！姫様だからって何しても許されるわけじゃないだろ！！？

月影

噂って、緋炎、お前長から何も聞いてないのか？

緋炎

え？何が？

楓

もしかして衣伏さんも？

衣伏

ええ。何分急だったもので詳しいことは何も。

月影

まあ向こうで話して秘密がバレるよりはこっちで事情を話した方が賢明かもしれないけど……。

緋炎

……秘密って？

月影

ああ……後で話してやるよ。とりあえず長旅で疲れたら？今日は姫さんもいる。「小さな宴会」だ。

綾姫

楽しみです。

全員、センターで半円になる。月影、真ん中に入る。

月影

「小さな宴会」恒例、月影の爆笑時間！己の肉体のみを使い、瞬間芸で見る者を笑わせる秘儀！

俺はこれを「発ギャグ」と名付けた！

全員

一発ギャグ！

月影

前回はドン引き、失笑の繰り返しで無かった事になってしまったが、我、今ここに復讐を誓う！

緋炎

何だか分かんないけど格好いい！

月影

それではいきます！月影がお送りする一発ギャグ！まずは一発目！

月影、一発ギャグをやる。(以後、うけるうけないに関係なくやる)

楓

からの！

月影

からの！？

全員

からの！

月影

からの……。

月影、二発目をやる。

楓

さらに！

月影

さらに！？

全員

さらに！

月影

さらに……。

月影、三発目をやる。

綾姫 楓、今の笑い所を説明してちょうだい。

月影 笑いに関しては厳しすぎるだろ！

楓 無かった事にしましょう。

月影 アンタには優しさが無いのか！

緋炎 大丈夫！兄者は今のが面白いと思ったただけだよな。

月影 お前は優しさを履き違えてる。

衣伏 私は、あの……あの、その……。

衣伏、何か言おうとするが、言葉が出てこず、素に戻る。

月影 何もなしかよ！

綾姫 月影。

月影 はい？

綾姫 二発目は？

全員 姫様!?

青十郎が入ってくる。周りを見渡して、月影と目が合う。

青十郎

……スベったのか。

月影

アンタは武士の情けをどつかに落としてきたのか？

緋炎

なあ、兄者。俺にはやっぱり遊びほうけているようにしか見えないんだが。

月影

今日だけ見ればな。

緋炎

……なんだよそれ。

月影

緋炎、お前も里で習ったろ？この世界にはあの世とこの世を行き来できる門があるって。

緋炎

地獄門のことか？

月影

ああ。行き来できるといってもこの世の人間がああ世に行くことは考えられない。門が使われるとすればあの世のモンがこっちに來る時だろうな。

青十郎

しかも大抵タチの悪い亡霊らしい。生きてる人間にとりついて殺してしまうんだと。

月影

だからその門が使用されないように誰かが見張ってる必要がある。

青十郎

見張るだけじゃない。門そのものを封印しなくてはならないんだ。

緋炎

……で？

月影

その門がこの国、三葉にあったとしたら？三葉の血族は門を封じるための霊能力を持っていたとしたら？

緋炎

え？じゃあ！？

青十郎

綾姫は霊能力を持って生まれた。封じる者としてのお役目を立派に遂行なさっている。

月影

この岩の向こうに門があつてな。門の前で姫さんはずっと祈りをささげている。どういいう仕組みになつているのかは分かんが、この岩は一度閉じると次に開くまで30日かかる。

緋炎

30日！？

青十郎

だから30日間祈りをささげた後、一日だけこつして一時を過ごし、再び祈りをささげる為に中へ入るわけだ。それを姫は12の頃から続けている。

緋炎

そんな！だって、12っていったら遊びたい盛りだろ！？なんで姫様だけが！

月影

言葉通りさ。姫さんだけが、霊能力を持っていた。だからだ。

緋炎

姫様！

緋炎、綾姫の前で土下座する。

緋炎

姫様すいませんでした！俺、そんなことちっとも知らなくて、噂だけ信じて失礼なこととしてしまいました！どうか、どうか許して下さい！

綾姫

……顔をあげなさい、緋炎。

緋炎

でも！……。

月影

緋炎。

緋炎、ゆつくり顔を上げる。

綾姫

知らなかったことを責めるのは愚か者のすることです。何より、あなたは私の為に心を痛めてくれた。嬉しく思います。これでまた一人、守りたいと思う人が増えました。それが私の力になるのです。

緋炎

姫様、俺、今は全然弱くて力になれませんけど、強くなります。強くなって必ず姫様を守ります。

綾姫

……頼りにしていますよ。

緋炎

はい！

青十郎

ただ分かっていと思うが、くれぐれも内密にな。

緋炎

分かりました。……でも、そんなに大切な場所ならもっと多くの人間で守った方がいいんじゃないですか？

月影

バーカ。こんな辺鄙な場所に大勢の兵士がいてみる。何かありますよ「って言ってるようなもんだろ。

楓

だから城から一人。忍の里から一人。一番強いものがこうして姫の護衛についているというわけ

緋炎

なるほど。

月影

理解したか？なら、姫さんの為にも強くならなきゃな。

緋炎

ああ、頑張る。強くなつて、今度来るときは姫様の護衛としてだ！

綾姫

楽しみにしています。

楓

さて、姫様もお疲れでしょう。衣伏さんも。少し休まれては。

綾姫

そうですね。そうしましょう。

楓

ではこれを。

楓、上手に布団を取りに行きすぐ戻ってくる。姫に赤い色の掛け布団を渡す。

他には黒い布を渡す。

青十郎

（衣伏に）このあたり一帯は俺とコイツで守ります。安心して休んでください。姫、良き眠りを。

綾姫

有難う。

月影・青十郎・緋炎を残して全員上手へ。

月影は舞台の客席側を、青十郎は舞台の奥側を見回る。

緋炎

兄者。

月影

どうした、寝ないのか？

緋炎

せつかく久し振りに兄者に会えたのに寝るなんてもつたいないだろ。

月影

……気持ちの悪いやつだな。

緋炎

ひ、ひでえ……。

月影

あ、そうだ。お前さつき城でも里でも死人が増えてるって言ってたな？あれ、どういう意味だ。

緋炎

いや、俺も詳しいことは分からないんだけど、とにかくいろんな人間が死んでるんだ。

青十郎

殿は無事なのか？

緋炎

え、あ、はい。

青十郎

……そうか。

月影

いろんな人間って……何か特徴はないのか？

緋炎

いや、本当にいろいろで……年齢も性別も職業もいろいろ。共通点があるとすれば……殺された

人は里や城から出ていた人ってことかな。

月影

里で忍を殺せば自殺行為だからな。

緋炎

うん……。でも殺しまわってる奴は相当手練れだと思っ。

月影

どうして？

緋炎

上忍まで殺られてるんだ。

月影

上忍が！？

青十郎

……上忍？

月影

忍にも位があつてな。下忍・中忍・上忍。上忍ぐらいになると、一人で他国の城へ侵入し、殿様を

暗殺することだって出来る。その上忍を越す力を持つているとすると、かなり厄介な相手だな。

青十郎

……それはいつ頃からだ？

緋炎

一ヶ月位前から……だと思えます。

青十郎

城内で対策は立てていないのか!?

緋炎

俺にはよく分らないです。ただ長達が言うには、城のお偉いさんは他国の仕業なのか、謀反なのか、決め兼ねて話がまとまらないと。このような事態に対応する規律がないからって……。

青十郎

何をやっておるのだ、お歴々は！

月影

それで、里の長は何て言ってるんだ？

緋炎

忍は君主を守ることが役目ではないと。上からの命令が無い以上、里の守りを堅める考えらしい役目とかそんなことにこだわってる場合じゃないだろ！この大変な時期に!!……なあ、青十郎。

青十郎

何だ？

月影

そういえばあの影のようなあやかしが現れたのも一ヶ月位前からじゃないか？

青十郎

……確かに……。城や忍の里で死人が増え、あやかしも増えている。

青十郎、一人何かを考え込む。

緋炎

ねえ兄者。

月影

ん？

緋炎 青十郎様つて、昔の兄者に似てるな。

月影 まあな。でも違ふところもある。アイツは、

青十郎 誰と誰が似ているだど!?

月影 地獄耳だ。

青十郎 貴様。今、俺とコイツが似ていると言ったのか?

緋炎 あ、いや、その。

青十郎 こんなチャランポランでいい加減で無責任で…彼女いない歴丸2年の男と、俺が似ているだど!?

月影 お前、最後のは言っちゃいけないやつだろ。

緋炎 ですから、昔の兄者」と似ていると言ってるんです。

青十郎 昔の? 昔と今では違ふのか?

緋炎 かなり。……昔の兄者は忍の掟を第一に考える男でした。他人にも厳しかったし、それ以上に自

分に厳しい人でした。

青十郎 ……貴様が?

なんだよ、信じられないか?

青十郎 当たり前だ。

月影 まあ、昔の話だ。

青十郎 なぜ生き方を変えた?

月影 今のアンタには言っても分からないかもな。

青十郎

……面白い。話してくれ。聞いて判断しよう。

月影

やれやれ。……アンタも知つての通り、俺は鬼との間に出来た子だ。行き先なんて決まつてる。見世物小屋か、一生山の中で隠れて暮らすか、あるいは忍になるか。俺は幸い長に拾つてもらつてな。忍になることができた。でもまあ、ガキなんていつでもどこでも似たようなもんだろ？理解できないものには拒否反応を示す。いじめだよ。その頃の俺も、今だって、人間と何も変わりはないのにな。

緋炎

むしろ兄者は誰よりも強くなつたんだ。

月影

一人の人間として認めてもらう為にな。忍は実力主義だったから強くなりたかつた。信用してもらひかつたから掟を何よりも重んじた。俺は異例の速さで上忍になることが出来た。

青十郎

素晴らしいことじゃないか。全ては掟、規律を守つたからだろ？

月影

青十郎、確かに規律は大切なものだ。それを否定するつもりはない。だが、規律に生きるのとは駄目だ。規律に生きるということは楽をするということだ。大切なのは自分。青十郎、アンタ自身の気持ちなんだ。……それに気付いたのは緋炎、お前のおかげだったな。上忍になつた俺は二人の中忍を連れて、ある国の情勢を調べる為に偵察に出た。二人の動きもあつて偵察はすぐに終わった。その帰り道、山の中で四人の人影とすれ違つた。正体は付近の村人だったが、敵の忍と勘違いした一人の中忍が一人の男を斬つてしまつたんだ。四人の人影は家族だった。父母娘と息子。その父親を斬つてしまった。母親は近くにいた娘の手を取り、悲鳴を上げながら逃げた。……忍の掟には「殺しを見た者は皆殺しにしろ」というものがあつてな。もう一人の中忍がそれを守り、

母と娘を斬った。俺の目の前には男の子が一人。状況を把握できずにたたずんでいた。

青十郎 ……斬ったのか？

緋炎 斬ったら、今俺はここにいませんよ。

青十郎 貴様がその時の？

緋炎 はい。……兄者が斬ったのは中忍二人の方です。

青十郎 それは里への裏切りではないのか？！

月影 まさしくそこだよ青十郎。俺は緋炎を斬りたくないと思った。俺は俺を裏切ることができなかった。

緋炎 掟は所詮、他人の作った規律。大切なのは自分の思い、そして判断。……そうだよな、兄者。

月影 ……俺を憎んではないのか？

緋炎 もう、その台詞何度目だよ。兄者には感謝してるって言ってるだろう？

青十郎 中忍二人を斬っておいて、よく里の長を騙せたもんだ。

月影 偵察の成果は上々だったからな。特に問題はない。忍なんて中忍以下は使い捨ての駒みたいなもんだ。

青十郎 で、それが掟や規律に疑問を持ち始めたきっかけというわけか。

月影 まあな。

緋炎 里に帰ってからの兄者は徐々に掟という枠からではなく、自分で考えて行動するようになった。

青十郎

……なぜ斬らなかつた？

月影

アンタが俺の立場だつたらどうしていた？

青十郎

俺は規律を守る。

月影

青十郎は意外と自分で自分のことが分かっていないな。

青十郎

何だと？

月影

……アンタに緋炎は斬れない。

青十郎

俺には規律が絶対だ。

月影

まあ、掟を大切にしていた昔の俺うんぬん抜きにして、心の根っこでは俺達は結構似ていると思っ

てるんだがな。

青十郎

俺と貴様が根っここの部分で似ているだど？冗談は顔だけにしてもらおうか。

月影

例えば今の時間、丁度楓殿が水浴びをしている頃だ。覗きたいと思うだろ？

緋炎

兄者、それは似ているとかの問題じゃなくて、男なら誰でもなんじゃ……。

青十郎

バカ者!! 男子たるものそのような邪な行為は断じてするものではない!!

月影

あーそうかよ。じゃ、俺と緋炎だけで見ようか。

青十郎

そんなことさせると思うか!?

緋炎

つて言いながらこつちに来たいんですね。分かります。

青十郎

そういうことじゃないだろう。

月影

なんだよ、こつちに来ないのか？

青十郎

行かん!!

緋炎

止めるんじゃないですか？

青十郎

止めん!!

月影

あーそう。じゃ、緋炎、楓殿の水浴びをとくと見せてもらおうか。

青十郎、下手の方を向いて目を閉じる。

月影と緋炎、最初は上手を向いて話すが、徐々に下手を向く。

月影

おお！丁度良い頃だ！

緋炎

楓様！す、凄い!!

月影

うゝむ、眼福眼福。緋炎、よく目に焼き付けておけよ。

緋炎

ああ!! 兄者、女体とはこんなにも神々しいものなのか!!

月影

楓殿はまた格別！見ろ、あの餅のような肌を!!

緋炎

里のくの一全部を集めたって楓様にはかなわないな！

月影

くの一と比べること自体が楓殿に失礼だぞ！

緋炎

確かに!!

青十郎、我慢しきれなくなつて上手を見る。が、二人がこちらを見ていたのでビクツとする。

月影

……な？

緋炎

……ああ。

青十郎

バカ者!!俺は今、蚊がうっとうしくしてだな!!

月影

うっとうしくして？

青十郎

叩いて殺そうとしてた、追っていたら蚊がそっちに飛んで行ったと、そういうわけだ!

緋炎

兄者、蚊だつて。

月影

ふらん。

緋炎

ふらん。

月影

せーの、

月・緋

ふらん。

青十郎

合わせるな!!

月影

まあいいじゃないか。青十郎も男つてことだな。

青十郎

だから俺は……!!

笑っていた月影、怒っていた青十郎、次第に真顔になる。

月影

……そろそろ頃合いか？

青十郎

そうだな。やはり貴様も同じことを思っていたか。

月影

緋炎のように信じ過ぎるのも考えものだがな、あの反応は少しおかしい。

緋炎

なんだよ？

青十郎

俺はここらで罫を張るとしよう。

月影

俺は姫さんの傍にいる。

青十郎

本来なら貴様のような身分の者が姫の傍にいることなど、

月影

分かった、分かった。ここは一つ、互いの役目をきちんと果たそう。緋炎、お前もこっちに来て。

青十郎

姫は任せたからな。

月影

ああ。

月影と緋炎、上手へ去っていく。暗転。

青十郎、赤い布団を袖から受け取り、舞台の真ん中で横になる。

暗転の中、虫の声。時間が経過したことを示す。照明、ゆっくりと夜の明かりに切り替え。

舞台上には赤い布団をかぶった青十郎だけ。

上手から衣伏が入ってくる。センターまで来て布団を見下ろす。

何か考え事をしてる様子。やがて小刀を取り出し、構えるが動かない。

青十郎

暗殺つてのは迅速かつ正確にやらないといけないんじゃないのか？

その声に驚き距離をとって構える衣伏。赤い布団をどかし、立ち上がる青十郎。

青十郎

何か怪しいと思っていたら案の定こいつのことか。貴様、どこの国の者だ。

衣伏、黙っている。

青十郎

女を殺すのは主義に反する。しかし、姫を狙い、この国の秘密まで知ってしまったんだ。それなりの覚悟はしてもらおうか。

衣伏が再度構える。

青十郎

主義に反すると言ったろう。だがそれでも来るといふのなら……俺も死ぬわけにはいかんのでな。

青十郎、刀を抜く。衣伏、小刀で青十郎に斬りかかる。青十郎と衣伏の殺陣（30秒程度）。

最終的には青十郎が袈裟斬りを寸止め。

青十郎

くの一ってわけでもなさそうだな、攻撃が雑すぎる。……どこの国の人間だ？

衣伏 私はどここの国の人間でもない。

青十郎 どここの国の人間でもない……なのになぜ姫を殺そうとした？お前、さっきの話を聞いてなかったのか？それとも信じられないか？

衣伏 聞いていた。……いや、知っていた。

青十郎 知っていた？

衣伏 だからこそ。姫を殺し地獄門を開け、世界中の人間を滅ぼす。

青十郎 貴様……何者だ？

衣伏 私は……。

斬り合いの音を聞きつけ全員が上手から入ってくる。

月影 どうした青十郎。斬り合いの音が聞こえたが……。

衣伏 綾姫！覚悟！

衣伏、綾姫の姿を見た瞬間、青十郎の刀を逃れ、小刀を構えて突進する。

が、その前に月影が立ちふさがり、一閃で衣伏を退かせる。

ひざまずく衣伏。月影、切先を衣伏に向けて動けなくする。

青十郎

貴様、姫に何の恨みがある。

衣伏

綾姫個人に恨みはない。……いや、これは恨みではない。……これは救いなのだ。

青十郎

救い？世界中の人間を滅ぼすのが救いだというのが。

月影

世界中の人間を滅ぼすって……アンタ気は確かか？

衣伏

確かなもんか。狂ってるさ、とっくに。

青十郎

とりあえず明日の朝一に移動して城へ連れていく。2日ほどかかるが、明日には姫は岩の中へ入ら

緋炎

れる。岩の前でなら貴様でも守れるだろう？

青十郎

俺もいるよ。長からはすぐ帰って来いって言われてないし。

青十郎

ま、コイツ一人よりマシだろうな。楓殿、城へ着いたら代わりのお付き役と共に戻ってきます。そ

楓

れまでしばらくこのままで。

青十郎

私はいつまでも構いませんけど。

月影

助かります。

青十郎

じゃ、とりあえずコイツふん縛っておくか。

楓

楓、衣伏から小刀を奪う。

青十郎

地響きのような音。全員、辺りを警戒する。

青十郎

何だこのまわりつくような空気は?!?

緋炎

押しつぶされそうだ！

楓
姫様！

綾姫
大丈夫です！それより恐ろしい何かが近付いています。これは……人？それともあやかし？

月影
青十郎！緋炎！三人で姫さんを囲むんだ！

三人、バツと動いて、姫、楓、衣伏を背中を守る。ゆっくりと円を描きながら動く。

地響きの音、さらに大きく。

月・青

来るぞ！

下手より紅葉が走って月影達を一閃。激しい爆音とともに弾き飛ばされる全員（衣伏以外）
全員を見下ろす紅葉。寄り添う衣伏。

月影
……何なんだアンタは！？

紅葉
綾姫は？

衣伏、綾姫を指差す。刀を持って綾姫に歩み寄る紅葉。

月影

姫さんに何するつもりだ！

月影、紅葉を攻撃するが簡単に受けられ、飛ばされる。

綾姫

月影！

緋炎

兄者！

青十郎

姫には指一本触れさせん！

青十郎、紅葉の前に立ちふさがり、攻撃を仕掛ける。が、同じように簡単に受けられ飛ばされる。
紅葉、ゆつくり姫に歩み寄る。両手を広げて立ちはだかる楓。

楓

あなたがどなたか存じませんが、お引き取りを。

紅葉

綾姫。あなたに恨みはないが、人々を救うためだ。死んでもらう。

楓

人々を救う？ 姫様は守っているのですよ！？

紅葉

いざ、覚悟……。

紅葉、刀を構え、振ると同時に緋炎が楓と綾姫を押しして避けさせる。

楓、小刀を落とす。それを拾う衣伏。

移動し、月影・青十郎のもとへ。5人がまとまる。

紅葉、ゆっくり振り返り再び前へ出る。月影と青十郎、二人揃って前へ出て刀を構える。

紅葉

……どけ。……邪魔だ、どけ。

月影

どけと言われて素直にどく訳ないだろ。

月影、斬りかかるが避けられてしまう。体勢を整え構えなおす。月影・青十郎で挟み打ち。

青十郎

本来であればこのような多勢に無勢、納得いくところではないんだがな。

月影

言ってる場合か！真面目も大概にしろ！

青十郎

分かっている。コイツは強い。悔しいが俺一人では歯が立たん。

月影

いけるか!?

青十郎

おお！

月影・青十郎、紅葉に斬りかかる。しかし逆に少しずつダメージを受ける二人。

途中、「破壊の力」の攻撃を受ける月影。月影、弾き飛ばされる。

綾姫・楓・緋炎、心配する声。

月影 何だコイツ。妙な技を使うぞ。

青十郎 あやかしか！

紅葉 貴様等の知ることではない。……衣伏、綾姫を殺せ。

衣伏、少し考えた後、小刀を構える。相対する緋炎。

月影 緋炎！

緋炎 こっちは大丈夫！これでも少しは強くなったんだ！

衣伏と緋炎の睨み合い。青十郎、気合いの声をあげて紅葉に攻撃を仕掛ける。

殺陣の中、青十郎の刀が大きく弾かれる。スキができる青十郎。

月影 青十郎！

月影、紅葉に攻撃を仕掛ける。受ける紅葉。その間に体勢を立て直し、攻撃に参加する。しかし、少しずつダメージを受け、二人、最後に「破壊の力」を受けてしまう。

上半身だけ起こして、紅葉を止めようとする。紅葉、綾姫に近付こうとする。

衣伏と緋炎は互いに攻撃し合っている。月影と青十郎、必死に体を起こし、紅葉にしがみつく。

月影 楓殿！姫さんを岩の中へ！

綾姫 月影！青十郎！

青十郎 岩の中なら安全です！そうして下さい！

綾姫 でも！

月影 早く岩の中へ！

紅葉 貴様等、どこまで邪魔すれば気が済むのだ！

紅葉 破壊の力」を解放する。飛ばされそうになる二人。

楓 姫様、早く岩の中へ！

綾姫 でも月影と青十郎が！

楓 お二人は姫の為に命をかけているのです！二人のことを思うなら早く！

月影 姫さん、行ってくれ！

青十郎 行ってください！もう持ちそうにありません！

紅葉 どけ……どけ……！

楓 姫様！

楓、強引に姫を突き飛ばし岩の中へ入れる。大きな音を立てて閉まる岩。全員止まる。静寂。崩れ落ちる月影と青十郎。

緋炎
兄者………貴様——！

緋炎、紅葉に斬りかかるが、避けられ「破壊の力」を受ける。飛ばされてグツタリする緋炎。

月影
緋炎！

紅葉、目の前の岩を見上げる。上段に構え一閃。岩は崩れない。

紅葉
さすがに「破壊の力」を持ってしてもこの岩は斬れんか……。貴様等、なぜ我の邪魔をした？
なぜだ？主君を守るのは武士として当然だろ！

紅葉
綾姫が死ねば地獄門が開く。そうすれば人々は救われるのだぞ？

月影
だからどうしてそうなるんだよ！悪霊にとり憑かれて死ぬだけだろうが！

紅葉
多くの弱き者にとってはその方がいいのだ！弱き者にとってこの世は地獄。死ぬことこそ救いとなる。………岩が閉じられた以上、30日待たねばならん。貴様等だけでも先に救ってやろうか。

紅葉、刀を構えなおそうとする。

衣伏

紅葉。……いいじゃないか。この世は地獄。死こそ救い。邪魔をしたコイツ等にはもう少し地獄を味わってもらおう。

紅葉、その言葉に無言で刀を戻す。

紅葉

我は30日後に来る。貴様等は消えておけ。……衣伏。

紅葉と衣伏、寄り添うようにして下手に去っていく。全員センターへ。

月影

楓

楓殿、ありがとうございます。おかげで姫さんを助けることができました。それより月影様や青十郎様の方が。

青十郎

俺は大丈夫です。……そっちは？

月影

緋炎。

緋炎

俺も大丈夫……って言いたいけど、ちょっと無理。しばらく動けそうにないや。

月影

まあ命があっただけマシだろ。

青十郎

貴様、なぜ余力を残した？

月影 何だと？

青十郎 あんな一大事の時になぜ「鬼の力」を解放しなかった。貴様の役目はそういうことだろう！その鉢巻を取って鬼の力さえ解放していれば、あるいわ！

緋炎 勝手なこと言うなよ！鬼の力を解放し続ければ、兄者は本物の鬼になっちまうんだ！おいそれと鉢巻は取れないんだよ！

青十郎 その為の貴様だろうが！

月影 余力を残したのはお互い様だろう！その刀は飾りか！？

青十郎 これは！

楓 月影様、代償があるのは青十郎様も一緒です。この刀は三葉家に伝わる「血吸丸」。主の血を吸って力にし、全てのを切り裂く妖刀なのです。使用すればするほど刀に血を吸われ、最後には50命を落としてしまいます。

月影 その為のアンタだろうが！……鬼の力も妖刀も使わなければ何の役にも立ちほし……。

静寂

青十郎 あれだけ偉そうに忠誠の講釈を垂れておきながら、結局俺は自分の命を優先したのか……。

月影 俺も同じだ。覚悟を口にしながら、この手が鉢巻を取ることはなかった。

青十郎 俺は……。

月影

俺達は、

月・青

弱い。

楓

何バカなこと言ってるんですか！お二人が弱かったら他の人達はどうなるんです！？お二人は弱いんじゃないありません！危機に甘いんです！

月影

危機に甘い？

楓

お二人は強いです。今まで誰にも負けたことがないと思います。ですから、自分より強い相手に遭遇したことがないんです。つまり、危機を危機と認識する判断基準が甘いということ。それとも何ですか？今また同じようなことが起こったとして、それでも鉢巻をとりませんか？刀を抜きませんか？

月・青

そんなはずないだろう！

楓

お二人は強いです。ですが、相手をもつと強いだけです。

月影

力が欲しい。このままでは守れない！力がなければ守りたいものが守れない！力が欲しい。強くなるための力が欲しい！力が欲しい！

静寂。下を向いていた青十郎、意を決したように前を向く。

青十郎

……月影！

月影、青十郎の方を向く。

青十郎 俺の知ってる剣術をすべて教えてやる……お前の知ってる剣術をすべて教えてくれ。

月影 青十郎……。

青十郎 力を望むということは逃げる気はないんだろ？なら30日後には再び奴と刀を交えることになる。

それぞれがそれぞれの方法で腕を磨いても劇的な変化は望めまい。

月影 いいのか？身分の低い忍から教わることになるんだぞ？

青十郎 同じ相手に2度も負けるよりはマシだ。

月影 30日しかない。手加減はできないぜ？

青十郎 気が合うな。同じ事を言おうと思っていた。

月影 じゃあ早速始めよう。

月・青 特訓だ!!

特訓をしつつ日々が流れるエチュード。音楽。

特訓を見ている緋炎。楓、一度はけて、衣類を持って入ってくる。洗濯のマイム。

月影、青十郎は特訓をしつつ下手にはける。緋炎、楓に近づいて。

緋炎

楓様。

楓 はい。

緋炎 手伝いしましょうか？

楓 有難うございます。でも、これは私の仕事ですから。

緋炎 そうですか……。あの、晩飯の準備、俺しましょうか。

楓 ……どうしたんです？

緋炎 何かやることありませんか？俺、ここに居ても何の役にも立ててないです。

楓 月影様から言いつけがあるのではありませんか？

緋炎 でも一人で素振りするばかりです。兄者達のようなもつと実践的な修行の方が！

楓 緋炎様、私は賄いのことばかり学んできましたから剣術のことは分かりませんが、基礎が大切ということでは賄いも剣術も同じではないでしょうか。

緋炎 それは……。

楓 お気持ちは良く分かります。月影様や青十郎様の御役に立ちたいのでしょうか？でも、これは私の為すべき事。緋炎様には緋炎様の為すべき事があるはずですよ。

緋炎 素振りが俺の為すべき事ですか！俺、ここに居たいんです。少しでも役に立てればここに居てもいいですよね？

楓 それは私が決めることではありません。勿論、月影様や青十郎様が決めることでもありません。自分の居場所は自分で決めるべきだと思います。誰かの判断で物事を決めるべきではないというのが月影様のお考えです。その考えの一番の理解者は緋炎様のはずでは？

緋炎、項垂れて考える。楓、優しく語り始める。

楓 私は……。私は、為すべき事を為していれば、人は居るべき場所へ行けると思っています。

緋炎 為すべき事を為していれば、ですか？

楓 そういう人物を一人知っています。決して恵まれた環境ではないけれど、信念を貫き己の望む場所へたどり着いた人物を。

緋炎 その人って……？

楓 剣の腕を見込まれて田舎から出てきた一人の御侍です。出自がそうでしたから城の者からは笑いにされています。実力ではなく血筋を重んじる城の考えで、その方は正当な評価を得ることが出来ませんでした。

緋炎 忍の里とは反対ですね。里は徹底した実力主義です。

楓 殿もそのような考えにすべきと前々からお考えのようでしたが、一部の者達がそのような考えを良しとせませんでした。城にあるのは見栄と欲望と策略です。……その方はいつも利用されてきました。

照明切り替え。影2、上手より入ってくる。

影2 青十郎！青十郎は居るか？

青十郎、下手から入ってくる。

青十郎 はっ………

影2 青十郎、今度の剣術大会でそちと当たるのは息子、秀信だったな。

青十郎 はい。………お強い秀信様と剣を交えられるのは光榮至極。全力で挑ませて頂きます。

影2 世辞はよい。秀信がどうして強いものか。あれに剣術の才がないことは父親のわしが良く分かっておる。

青十郎 ……決してそのようなことは。

影2 そこでだ、青十郎。次の剣術大会、秀信に勝つことは許さぬ。

青十郎 それは！

影2 よいな？秀信に傷一つ付けてはならん。お前は自分から攻めてはならんのだ。

青十郎 私に八百長しろとおっしゃるのですか。

影2 お前も知っておろう？剣術大会最下位の者は一ヶ月間廁掃除の罰だ。どうして秀信がそのような雑事をせねばならん？血筋的にも相応しい者がいよう？

青十郎 ……それが、私だと。

影2 そちを城から追い出すことなど簡単なのだぞ？………田舎には親兄弟が居るのだろうか？また

青十郎

貧しい思いをさせたいか？

……かしこまりました。

影2、上手にはける。

楓

剣術大会は言われた通り一振りもすることなく敗れました。青十郎様の剣の腕は城の全ての者が知るところです。秀信様が十人いたとしても負けるような方ではありません。ある程度の勤の働く者であれば裏でどのような話し合いがされたのか分かります。それ以来、青十郎様は利用され続けたのです。

影3、が上手より入ってくる。

影3

青十郎、ここにいたか。

青十郎

師範代。どうされたのですか？

影3

次の殿の前での御前試合、私の相手にお前の名前を挙げておいたぞ。

青十郎

御前試合にですか！？

影3

殿の前で剣が振れるのだ。大変名誉なことなのだぞ？

青十郎

はっ！精一杯務めさせていただきます！

影3　そこで、なんだが。

青十郎　……………はっ。

影3　始めの合図がかかったらお前は上段に構え一気に振り下ろすのだ。私はそれに合わせて銅払い

一閃でお前に勝つ。

青十郎　師範代！御前試合ですぞ！

影3　お前、師範代の私に勝てると思ってるのか？本気を出せば私に勝てるでも？勝って師範代の

座を奪おうというのか？

青十郎　私はただ全力で望みたいだけです。

影3　道場でお前が私から1本でも取ったことがあるか？お前、本気で挑んでなかったというのか？

青十郎　……………いいえ。……………そのようなことは、決して。

影3　どうせ負けるなら一瞬で終わらせてやろうという私の心が分からんか。御前試合にお前を指名

したのもお前のことを思ってたのだぞ？

青十郎　……………お心遣い……………感謝いたします。

影3　いいな？上段に対し私が胴払いで合わせる。忘れるなよ。

青十郎　……………かしこまりました。

楓　そして、青十郎様は当日、言われた通りに動きました。

影1、4、5が下手から入ってくる。

影4 御前試合である。双方務めるように。……始め！

青十郎と影3、しばらく睨み合い。青十郎、上段に構えて刀を振り下ろす。それに合わせ影3、胴払い。跪く青十郎。

青十郎

……参りました。

影4 そこまで！

青十郎、影4、正座をして頭を下げる。

楓 勝負は一瞬で決まり、誰もが師範代の強さを称えました。でも……。

緋炎 でも？

殿が声をお掛けになったのは敗れた青十郎様だったのです。

影1 その方は……青十郎と言ったか。

青十郎、ビクツとして頭を上げてしまふ。

青十郎

え？……………あ、はい。

影5

貴様！頭が高い！御前であるぞ！

影1

よい。そのまま話せ。

影5

しかし！

影1

よい、と言っている。

影5

はっ！失礼致しました。

影1

青十郎、前の剣術大会でも厠掃除だったな。

青十郎

……………お恥ずかしい限りでございます。

影1

そんなに弱そうには見えんのだがな。

青十郎

ご期待に添えず申し訳ありません。

影1

私はな、この若さで一国の主となった。若い故に失敗も多い。

影5

殿！そのような話をされては！

影1、影5の言葉を手で制して。

影1

失敗も多いが、だからとてそこで止まるわけにはいかん。私は私の思う人物へと成長せねばならぬのだ。……………青十郎。

青十郎

はっ！

影1 お前はどんな男になりたい？お前のなりたい男とはどんな男だ。

青十郎 ……考えた事も御座いません。

影1 人間の想いの力というのは無限だと思わんか？自分の理想とする男を思い浮かべてみる。

青十郎 ……規律を守り、嘘偽りなく己の道を歩む、強い男です。

影1 そのような男になりたいか。

青十郎 なれますでしょうか？

影1 なれるとも！お前がそれを望み続けるのならな。……………青十郎！……………励めよ！

青十郎 はっ！

影1、3、4、5、上手にはける。

楓 それからの青十郎様は益々努力なさいました。剣術は基礎からやり直し、朝早くから夜遅くま

で、何千、何万回と素振りを繰り返し返しました。青十郎様は自分の理想とする姿に近付いていったのです。……………それからしばらくして、姫様の護衛を務める者を決める剣術大会が行われることになりました。

影2、上手より入ってくる。

影2 青十郎

影2 はっ。

影2 次の剣術大会、秀信は初手に突きを打つ。お前はそれを大きく払い、寸止めで勝つのだ。いいか、

寸止めだぞ。

青十郎 何故ですか？なぜ護衛を務める者を決める大会でそのような八百長をしなければならぬので

すか！

影2 何故だど？城の者なら誰でも知っていよう。地獄門がどこにあるのか。あのような場所に可愛い

秀信を何年も行かせると言うのか。

青十郎 場所などどうでも良い事です！大切なのは一番強い者がその任に就くべきだということではない

のですか？

影3が上手より入ってくる。

影3 ならばお前こそ、その任に相応しかろう。

青十郎 師範代！

影3 決勝ではお前と当たる事になるだろう。いいか？今度は私が上段で向かう。お前は胴払いで私に

勝つのだ。

青十郎 今まで剣術大会や御前試合で八百長をやってきたのは何の為です！名誉あるこの任に就く為で

はなかつたのですか？

影2 誰が好き好んであのような地へ向かうものか。

影3 強き者がその任に当たるべきなのだろう？お前が適任ではないか。

青十郎 真剣勝負をしたことがないので！自分がどれだけ強いのか分かりません。

影3 強しさ。少なくとも場内の中でなら一番だろうよ。だからお前がその任に就けばいい。

青十郎 ……よろしいのですね？

影2 誰も文句は言いませんよ。

青十郎 ……かしこまりました。

影2、3、上手へはける。

楓 その大会、優勝したのは青十郎様です。でも、ひと試合として真剣勝負はありませんでした。

緋炎 城の人間って腐ってますね。里じゃ考えられません。護衛の任を決める試合では死人が出ること

だってあるくらい皆真剣ですよ。

楓 でも少数だけでもともな人もいるのよ？青十郎様のよう。

緋炎 あと、楓様も。

楓 ありがと。……でも、一番の救いは殿が一番、人が出来てらっしゃることでしょうね。

影1、4、5、上手から入ってくる。青十郎、正座をして頭を下げる。

影1
面を上げい。

青十郎、頭を上げる。

影1
やはりこの場に立ったのはお前か。

青十郎
殿……私を信じて下さったのですか？

影1
お前の眼を見たからな。

青十郎
目を？

影5
貴様！殿と話をするなど百年早いわ！

影1
この者は綾姫を守る護衛の任に就いた。私と話をするに値する。

影5
しかし、それでは他の者に示しがつきませぬ。

影1
私は今、城主として話をしているのではない。綾姫の父として話をしているのだ。

影5
殿！

影1
もうよい。下がれ。お前達がいてはロクに話も出来ん。

青十郎
申し訳ございません。私が出過ぎたまねを致しました。

影1
お前が気を遣う必要はない。……………お前達、いつまで居る気だ？

影5

はっ！失礼致します。

影1

ついでに月影を呼んでまいれ。

影4

承知致しました。

影4、5、上手にはける。

青十郎

よろしいのですか？

影1

構わん。あやつ等がいては腹を割った話が出来んからな。

月影が上手から入ってくる。

月影

殿さん、呼びましたか？

青十郎

殿さん？

おお月影、こっちへ。紹介しよう。城内一の兵、青十郎だ。こっちが忍の里一の兵、月影。共に綾姫の護衛の任に就いてもらう。地獄門のことについてはもう聞いているな？

月影

はい。一通りは。

影1

ただ……正直に言おう。私は地獄門を封印する役目としての綾姫ではなく、私の娘として綾姫を守りたいと思っている。どうか力を貸してやってほしい。

青十郎

殿！お止め下さい！

月影

殿さんの気持ちは良く分かってるつもりです。

青十郎

この青十郎、命をかけてお守りいたします。

影1

そなた達の命だけでなく、人生をかけてもらうことになるぞ？

月・青

覚悟の上です。

月影、青十郎、言葉があつたので互いを睨む。少々バツが悪い。

影1

良い組み合わせかもしれんな。……私はそなた達を信じる！綾姫のこと、頼んだぞ！

月・青

はっ！

影1、上手にはける。照明切り替え。

青十郎

随分懐かしい話をされていますな。

楓

青十郎様……失礼致しました。

青十郎

構いません。丁度同じ話をコイツにしていたところです。

緋炎

青十郎様の話を、青十郎様が兄者に？

青十郎

自分を見つめ直す良い機会だからな。自分の中にあるわだかまりを全部吐き出さないと前へ進

めん気がしてな。

月影 あんたは真面目だねえ……。

青十郎 と、いうわけだ、俺が今ここに居るのは城内の腐った体質のおかげというわけだ。貴様のように

本当の実力で勝ち取ったというわけではない。そのことに対する負い目があったのは事実だ。

月影 負い目？俺に対して？

青十郎 俺は真剣な立ち合いをしたことがない。城の不拔けた連中を相手に八百長を繰り返してきた。

自分の弱さを悟られぬよう貴様を警戒していたのかもしれない。身分を下に見ることによってな。

俺は城内の連中と同じような目を貴様に向けていたんだ。

月影 全く、迷惑な話だな。

青十郎 その通りだ。貴様には申し訳ない事をした。……詫びよう。

青十郎、月影に頭を下げる。

月影 ……ま、確かにアンタの言う通り、俺は忍の里一強い男だ。真剣にやり合って全ての者を打ち負

かしてきた。間違いなく強い男だ。

青十郎 そうだな。

月影 いいか。俺は間違いなく強い男なんだ！

青十郎 だからそうだと云っているだろう！！こっして非礼も詫びたではないか！！

月影、青十郎の目をじっと見て、何も言わず場を外すように離れる。

青十郎

……やはり俺はアイツとは分かり合えん!! 何だあの態度は!! 嫌みったらしく何度も同じことを言っておって!!

緋炎

青十郎様、それ本気で言ってます?

青十郎

……何?

緋炎

特訓を始めて何度も本気で相手をしてると思いますが、今、何勝何敗ですか?

青十郎

……確か98戦49勝49敗だが……

緋炎

俺、兄者が一本取られたの初めて見ました。里にいた頃よりも強くなっているのに。

青十郎

だからどうしたのだ?

緋炎

だから兄者はこう言いたかったんです。忍の里で一番強い俺と同等の強さを持っているお前が

弱いわけないだろうって。

青十郎

だったらそう言えばいいだろう。

緋炎

青十郎様、それ本気で言ってます?

青十郎

……何?

楓

逆の立場で考えてください。青十郎様、月影様に同じ事を言えますか?

青十郎

まあ、言わんたらうな。

緋炎 やつぱり兄者と青十郎様は似てますよ。(楓に)ありがとうございます!俺、素振りしてきました!
す!

緋炎、下手へ去る。

青十郎 楓殿は何故、私の話を?

楓 緋炎様が、ここに居るからには何か役に立ちたいと。……ですから、為すべき事を為していれば、い
るべき場所へ行けると。

青十郎 ……私は為すべき事を為しているでしょうか?

楓 はい。そのように思っています。……緋炎様はまだ納得していないようでしたが……。

青十郎 あの年頃では仕方ありません。己の存在意義を求めて無性に走りたくなるものです。

楓 あまり焦らないと良いのですが……。それでは食事の用意がありますので失礼致します。

楓、青十郎にお辞儀をして上手へ去る。

青十郎 貴様はどうして残った。

月影 ん?

青十郎 再び奴が来れば命を落とすかもしれんのだぞ? ちゃらんぽらんな貴様らしくないではないか。

何の為に命をはるのだ？

月影

それは……教えねえよ。

青十郎

何だと？

月影

俺の事がそんなに気になるのか？あんたはコッチか？それともコッチか？

月影、オカマのポーズを左右でやる。

青十郎

同じことだろう！？俺は腹を割って話したというのに……もういい！やはり貴様は気に食わん！

青十郎、下手に去る。

月影

……何の為に命をかけるかだと？そんなの決まってるだろ。……あんたと同じだよ。ただ俺は……殿さんの為じゃないけどな。

照明変化。過去の明かり。

上手から綾姫が入ってくる。慌てていて、隠れる所を探している。月影に気付き、月影の後ろに隠れる。

上手袖からは5、6人の女中の綾姫様々！！と呼ぶ声が聞こえる。

月影

(綾姫に対して)……これは多分最善策ではないんじゃないだろうか？

女中が5、6人入ってくる。口々に綾姫様!!」どこへ行かれたのですか？」等と言う。女中の一人が月影に気付き、

女中1

失礼ですが、こちらに綾ひ……女の人が一人来ませんでしたか？

月影

ああ、それなら……!!

月影、「ここに」と言おうとするが、綾姫がマジで背中をつねる。

月影

ここに来てすぐにあつち(下手)に去っていききましたよ。

女中1

そうですか。ありがとうございます。皆、あつちへ行ったということですよ。

女中達、はい」と返事をして、綾姫を呼びながら下手へ去る。

月影

……なんだか分らないけど、行ったみたいですよ。

綾姫

快く庇って頂き、ありがとうございます。

月影

快くね。そうね。間違いなく肩甲骨あたり青紫になると思うけど、そうね。

綾姫

今あの者達に捕まるわけにはいかないのです。

月影

姫さんなら命令すれば言うこときくんじやないか？

綾姫

姫さん？

月影

え？

綾姫

え？

月影

あんた姫さんだろ？……この城主の娘。綾姫さんだろ？

綾姫

どうしてそれを！？

月影

この状況で驚く方が驚きだが、そうなんだろ？

綾姫

瞬時に人を見抜く力。あなた様はさぞかし高名なお方なのでしょう。

月影

瞬時っていうか、あの人達5・6人で大声で呼んでたからね。

綾姫

おみそれ致しました。

月影

聞けよ！

綾姫

ですがそのような方に庇って頂いたのであれば心強いです。どうか私をお守りください。

月影

分かった、分かった。……で、女中さん困らせてまでどうしたいの？

綾姫

ここで約束しているのです。

月影

約束？

綾姫

その者が早くここへ来てくれると良いのですが……。

下手から楓が入ってくる。

楓
姫様!!

楓!! ああ良かった。間に合った!! さ、楓こちらへ。

楓、綾姫の近くへ移動。

楓
綾姫
姫様どうされたのです? 姫様がいなくなつたと女中たちが大騒ぎしていますよ!?

あの者達には申し訳ないと思つています。後で特別な褒美を出しますので、それで許してもらつ
としましょう。私にとって今は楓が一番優先すべきことなのです。

楓
綾姫
私がですか?

そうです。…楓。

はい。

そなたの父、是清殿が亡くなられたのは一昨日の昼のことですね。

…え?

是清殿が病に伏せてから一ヶ月。楓は一日も休むことなく仕えてくれましたね。特に、私が城に
戻ってからはずっと。

楓
姫様…。

綾姫 床に伏している父親に会いたいと思いつつながら、私に仕えてくれたのですね。その気持ちに気付かなかったこと、どうか許してください。

楓 姫様……どうして……？

綾姫 是清殿が私の枕元に立ったのです。逝く前にどうしても楓に伝えたいことがあると……。私はその思いに応えなくてはならないのです。楓……恐ろしいと思うかもしれませんが、一人の父親として伝えたいことを漏らした無念。そなたなら聞き入れてくれますね？

楓 父上が……私に？

綾姫 覚悟はありますか？

楓 ……はい。

綾姫 分かりました。

綾姫、呼吸を整えて早九字を切る

楓 ……長くは持ちません。是清殿も。どうか悔い無き会話を望みます。

綾姫 姫様？大丈夫ですか？

綾姫 私は大丈夫です。それより、あちらを……。

下手後方より是清が入ってくる。

是清

：：楓。

楓

父上！？

是清

またこうしてお前と話ができるとは思わなかった。：：その為に大切な時間を使つてくださった

綾姫

綾姫には心から感謝致します。

是清

私の事は構いませぬ。是清殿、どうか伝えたかったことを。

楓

かたじけない。：：楓よ。

是清

はい。

楓

私の危篤にも迷わず姫に仕えたこと、父として誇りに思うぞ。

是清

父上：：。

楓

我が家は代々三葉家に仕えてきた家系だ。まだ物心ついたばかりのお前に敵しい躰をしたもの

是清

だな。礼儀作法から家臣の心構えまで。まだ幼かったお前には理不尽に感じたことだろう。：：

楓

すまなかつた。

是清

いいえ、そのお陰で今こうして姫様のお傍にいられるのです。父上には感謝しております。

楓

私に感謝か：：よもやお前がそのように思つてくれたとはな。

是清

勿論です。いえ、これまでだけではなく、本当はもつと教えて頂きたいことがたくさんあつたので

楓

す。ですが：：。

是清

やはり上手くいかないものだな、人生というものは。どうしようもできない今だからこそ互いに

すべてをさらけ出せるとは……。だが私は満足だ。お前の口からそのような言葉が聞けるとは思わなかった。

楓

私がつと早く素直になつていれば……。

是清

いや、私がお前に歩み寄るべきだったのだろう。……許してくれ。

楓

……父上。

是清

なんだ？

楓

一つ、お願いが。

是清

申してみよ。

楓

頭を……頭を撫でてほしく思います。

是清

頭を？……そうか。そうだな。私はお前の頭をただの一度も撫でたことが無かったな……。楓、近

くへ。

楓、是清の近くへ移動。

是清

ただな楓、これだけは分かってくれ。私は……いつでも本当はこうしたいと思っていたのだ。

是清、楓の頭を撫でてやる。

楓 父上、私は…父上の娘で良かったと心から思います。

是清 お前は本当に良い娘に育ってくれた…。体に気を付けるのだぞ？

楓 はい。

是清 殿を…姫を…三葉家を頼んだぞ。

力強く頷く楓。

是清、下手奥に去る。

楓 ……父上は…。

是清殿は立派な人生を歩まれました。一時の時間を要しますが、また再びこの世に転生するでしよつ。

転生…。

綾姫 生まれ変わるといふことです。生あるものは消滅しない限り常に廻り続けるのです。

楓 良かった…。私、いつかまた、父上に会えるんですね？

綾姫 ええ。会えますよ。

楓 姫様、折角のお休みの時間を、大切なお力を私の為に使ってよろしかったのですか？

だからこそ楓の為に使いたかったのです。そなたは私の為にこれまでたくさん尽くしてくれました。いつかお礼がしたいと思っていますのです。

楓

そんな、勿体のうございませう。

綾姫

楓は最初に会った頃から、この力を気味悪く思うことなく私と接してくれた。私はそれが嬉しかった。

楓

……姫様。

月影

力って……今のが？姫さん、あんた……。

綾姫

驚かせてしまいましたね。

月影

いえ、それは大丈夫なんです。……って事は、あの噂……。地獄門をこの国の者が封印してると話は本当だったんですか？それも……三葉家の血筋の者が？

楓

姫様、この者は？

綾姫

そういえば名前も聞いていませんでしたね。その方、名は？

綾姫の台詞の途中で下手から「姫様〜！」という声が聞こえる。

綾姫

戻ってきたようですね。そなたのお陰で私は楓にお礼をすることが出来ました。ありがとうございます。……

楓

楓！逃げましょう！
え？私もですか！

綾姫、楓の手を取って上手へ走り去る。女中が下手から上手へ「姫様〜！」と言いながら去る。

照明が変わり、現在の明かり。

月影

強烈な出会いだったな……。押しが強くて守る必要あるのか？」って思ったくらいだからな。でも……。そっじゃなかった。姫さんは強いんじゃない。姫さんは……。

照明が変わり、過去の明かり。

上手から女中の姫様〜!!」という声が聞こえる。上手から綾姫が走って入って来て、隠れる所を探す。月影を見つけると後ろに隠れる。その瞬間、女中が5〜6人入ってくる。

女中1

こちらに綾姫様がお見えになりませんでしたか？

月影

姫さんなら、アッ!

綾姫、月影の背中をつねる。

月影

……。つちに行きましたよ。

女中1

ありがと〜ございます。皆、あっちへ行ったそうです。急ぎましょっ!

女中達、姫様〜!」と呼びながら下手へ去る。

綾姫、後ろから出てくる。

月影

つねるの早くないですかね？

綾姫

ありがとつ月影。庇ってもらったのはこれで2回目ですね。

月影

今回はどうしたんです？また何かあったんですか？

綾姫

いえ、今回は単に自由な時間が欲しかっただけです。明日は封印の間へ戻る為に移動しなければなりませんからね。

月影

ちよつと聞きたかったんですけど。

綾姫

何です？

月影

姫さんがここに居て……今は誰が地獄門を封印してるんですか？

綾姫

お母様です。

月影

あ、なるほど。

綾姫

しかし今のお母様の力では一カ月がやつと。私はその一カ月だけ城に戻って来れるのです。ですが……

月影

が？

綾姫

あと2、3年もすればそれも難しくなるでしょう。……慣れましたけどね。

綾姫、力なく笑う。2人、無言になる。

月影

あの、封印の間ってどんな所なんですか？

綾姫

広さは……そうですね、あその木からここまでくらいで、天井は……天守閣くらいまであります。とても暗いですが不思議と空気は澄んでいますね。そして目の前に大きな……黒くてゴツゴツした岩で出来た門があります。

月影

そんな所にたった一人で居るんですか？

綾姫

ええ。

月影

何日も。

綾姫

そうです。正確には30日ですが。

月影

寂しいとかって思わないんですか？

綾姫

……寂しい？

月影

……あ！すんません！今のは無しで！いっす！気にしないでください、本当すんません！

綾姫

何をそんなに焦っているのです？

月影

いや、その……俺、無神経でした。

綾姫

構いません。大丈夫です。……そうですね、寂しくないと言えば嘘になります。ですが私が封印の間に居る事で大切な人々を守るなら……私はそこに居続けるでしょう。

月影

姫さんの大切な人って……。

綾姫

この世に生きる全ての人達です。

月影

会ったことが無い者ですら大切なのですか？

綾姫

月影：…。私はこうしてそなたと出会いました。大切に思っています。そして月影を大切に思う人は私だけではない。誰かも月影を大切に思っているでしょう。そして、その人も誰かに大切に思われている。…。そう考えれば大切な気持ちというのはどこまでも広がっていくのです。

でも生きてる人の為に姫さん一人が犠牲になるなんておかしだろ？

私は自分が犠牲になっているとは思っていません。……。これは私の使命なのです。

使命……。

綾姫

生涯貫くべき使命が生まれながらにしてある、というのは、ある意味幸せなことかもしれません。姫さん、それは……。

月影

下手から再び女中達の姫様〜！」の声。慌てる2人。

綾姫、月影の後ろに隠れようとする。

月影

言つときまずけど庇いますからね！大丈夫ですからね！つねらないで下さいよ？

綾姫

月影、それは振りですか？

月影

違います！

綾姫、月影の後ろに隠れる。女中達が入ってくる。

女中1 度々申し訳ございませぬ。こちらに姫様は戻ってきておりませんか？

月影 ああ、姫さんなら……。

女中2 待て。その方、後ろに誰かおるであろう。

月影 え？

女中2 誰をかくまっておる。……もしや！

月影 えっと、そのですね！

月影、綾姫を庇つつ上手の方を指さす。

月影 あっ！

女中全員上手を向く。月影、その瞬間、下手を向いて指笛を鳴らす。驚く女中達。

女中1 これは？

月影 (下手を指して)向こうの方から聞こえました！姫さんが見つかったんじゃ！

女中1 そうかもしれません。皆、やはりあちらの方じゃ!!

女中達 姫様〜！」と下手に去っていく。

月影 騙した俺が言うのもなんだが、あの人達、人を信じ過ぎじゃないか？

綾姫 月影。

月影 はい。

綾姫 今のは何です！？特別な忍の術か何かですか？

月影 今のは何です！？特別な忍の術か何かですか？

綾姫 今のは何です！？特別な忍の術か何かですか？

月影 今のは何です！？特別な忍の術か何かですか？

綾姫 今のは何です！？特別な忍の術か何かですか？

月影 今のは何です！？特別な忍の術か何かですか？

月影、再び指笛を鳴らす。

綾姫 そうーそれです！凄い術ですね。

月影 いやいや、これは術なんでもんじゃないやありませんよ。そこら辺のガキだってこうやって遊んでます。

綾姫 私にも出来ますか？

月影 そりゃ、まあ、練習すれば。

綾姫 練習します！教えてください。

月影

えっ!?

綾姫

指笛を教えてください。

月影

ええ!?!…どうして。

綾姫

楽しそうではないですか。

月影

そりゃまあ、奇麗に鳴った時は楽しいですけど、何も姫様がそんなことしなくても…。

綾姫

駄目ですか？

月影

駄目ってわけじゃ…。

綾姫

では教えてください。

月影

…分かりました。では、指をこうしてください。

綾姫

こうですか？

月影

はい。で、口に当てる。…で、吹く。

綾姫、吹くが音が出ない。

綾姫

…出来ません。

月影

コツがいりますからね。指の形や位置、角度なんか人それぞれですから、姫さんなりの方法を見付けないと。

綾姫

私なりのですか。はい。頑張ります。

綾姫、何度か挑戦するが出ない。

綾姫

月影。

月影

はい。

綾姫

やり方はこれで本当に合っているのですか？

月影

はい。合ってます。指笛はガキの遊びですが……ガキの遊びって、意外と上達するのに時間がかかるものなんですよ？

綾姫

なるほど。

月影

姫さんには指笛よりもお手玉やおはじきの方が合ってるんじゃないか？

綾姫

……どうですかね。

月影

どうですかねって……。

綾姫

やったことがありますから。

月影

え？

綾姫

私はそういった子供の遊びの類は何一つやったことがありません。物心ついた時から封印の間を

月影

守るための霊能力を磨くため、訓練を受けてきました。

綾姫

物心ついた時から？

綾姫

はい。

月影 だって、姫様だろ？二葉家城主の娘だろ？それが遊びの一つも知らないなんて！！

綾姫 すみません。

月影 いや、姫さんが謝ることじゃ…。

綾姫 ですからせつかく教えてもらった指笛、出来るようになりたいのです。

綾姫、再び指笛に挑戦する。

綾姫 ……難しいです。でも、出来たらきつと楽しいんでしょうね。

練習している綾姫を見つめる月影。ふと思いついたように

月影 姫さん！！

綾姫 はい。

月影 手裏剣って知ってますか？これは正真正銘、忍の技なんですけど。
いえ。

月影、懐から手裏剣を出す。

月影

これは手裏剣です。これを獲物目掛けて投げるんです。投げて当たったら凄いなと思いませんか!?

綾姫

凄いです!!出来るんですか!?

月影

任せてください。百発百中です。獲物は…あ、あそこに雀がいるので、あれにしましょう。…行きます!!

月影、手裏剣を構え投げようとした時に、綾姫が腕を掴んで止める。手裏剣がそのまま月影の腕に刺さる。効果音 グサツ!!」

綾姫

待つて月影!!

月影

痛って!!

綾姫

罪のない雀を狙うのは可哀そうです。…あの木から落ちる葉っぱにしてください。

月影

…分かりました。よく見ててくださいよ。

ここで肩車をした2人組が入って来ても良い。

上に乗っている方が葉っぱを持ち、落とす。それに向かって手裏剣を投げる月影。

当たっても外れてもオイシイ。(外れても当たった事にして続ける)

月影

ざつとこんなもんです。

綾姫

凄いです月影！私、こんなにハラハラドキドキしたのは初めてです！

月影

……楽しかったですか？

綾姫

はい！楽しかったです。とても良い思い出になりました！

月影

楽しかったんですか！？これが？たったこれだけの事が！？

綾姫

月影？

月影

姫さん、教えてくれ。本当に？本当にこれが……楽しかったですか？

綾姫

……本当です。楽しかったですよ？

月影

姫さん……あなたは……。

綾姫

私は月影を傷つけてしまったのでしょうか。

月影

違います！！そうじゃないんです……そうじゃなくて……。

綾姫

……ありがとう、月影。

月影

え？

綾姫

私を気遣ってくれたのですね。その優しさ、素直にありがとうございます。

月影

姫さん……。

綾姫

でも大丈夫です。大丈夫ですから。

綾姫、再び指笛に挑戦する。

月影 ……良くねえよ。それじゃ駄目だ姫さん。姫さんはもつと笑わなくちゃ。姫さんこそ、たくさん

笑わなくちゃ駄目だ！姫さんが、この世に生きる誰よりも一番笑わなくちゃ駄目だ！

綾姫 月影……。

月影 30日なんだろう？封印の間に入っているのは30日なんだろう？そうしたら1日出て来れるんだろ？

はい。

月影 なら出て来たその日は俺がたくさん笑わせてやる！その日は姫さんが笑い疲れて寝るくらい！

その1日を楽しみに他の30日が頑張れるくらい笑わせてやる！だから……だからお願いだ。

この程度の事を楽しいなんて言わないでくれ。

私の、「こんなに笑った日は初めて」が、30日毎に毎回更新されていくんですね！

綾姫 ……毎回更新はちよつと……。

冗談です。でも、それを期待しても良いのですよね？

月影 勿論です！！

綾姫、大きく頷く。それは感謝のお辞儀にも見える。

綾姫 それでは私は城内に戻ります。明日、出発ですからね。

月影 はい。ちよつくりお休み下さい。

綾姫

月影も。

綾姫、上手へ去る。それを見送る月影。
照明が変わり、現在の明かり。

月影

……命をかける理由。こればかりは言えねえよ。……言えるわけがねえ。

下手から青十郎と緋炎が入ってくる。

青十郎

貴様何をやっている!! 時間が無いと言っているだろ!!

月影

悪い悪い。ちっと考え事をな。

青十郎

もういい!! この場で始めるぞ!! 覚悟しろ!!

月影

命を張る覚悟を再確認したんだ。今の俺はちっと違うぜ。

青十郎

ふざけたことを!! それならその力、見せてみる!!

二人、組手を始める。

緋炎、二人の組手を見つつ素振りをする。やがて手を止め二人を見る。下を向き、去っていく。
月影と青十郎、二人で特訓を続ける。緋炎が二人に手拭いを持ってくる。

緋炎 お疲れ様です。

月影 おう、ありがとう。

青十郎 気持ちいいな。疲れが取れる。

緋炎 ねえ兄者、俺も特訓に混ぜてくれよ。

月影 お前には忍の課題を出しているだろ。

緋炎 そういうんじゃないくて、俺も侍の技術を学びたいんだ。俺だって強くなって二人の役に立ちたい！

青十郎 ……緋炎。お前忍の修業を始めてどのくらいになる？

緋炎 6年です。

青十郎 忍の技は6年で全て学べるものなのか？

緋炎 長は才能のあるものでも10年って言ってます。

青十郎 仮にお前に才能があつたとしても4年足りないわけだ。

緋炎 ですが！

青十郎 忍の技を学んで分かった。忍の技は相手を殺すことに特化した素晴らしいものだ。侍の技術も劣

らず素晴らしいものだが、下地があるならまずは忍の技を全て体得し、使いこなせるようになる

べきだと思うが？

緋炎 でもそれだと何年後になるか！俺は今役に立ちたいんです！

月影 お前がそう思って俺達の背中を見ているだけで充分役に立ってる。

緋炎 俺を子供扱いしないでくれ。

月影 子供扱いしてるわけじゃない。

青十郎 俺達は託しているんだ。

緋炎 託してる？

月影 俺達にもしもの事があつたら、緋炎、お前が何とかするんだ。今すぐじゃなくていい。何年かかっても必ず俺達の仇をとってくれ。

緋炎 何年かかってもって、それまでに人間が減んでいたら？

月影 大丈夫。人は、そんなに弱くないさ。

青十郎 分かったな？お前はお前の速さで成長すればいいんだ。

緋炎 ……はい……。……ん？

月影 どうした？

緋炎 いや、今……何でもない。じゃ、俺は向こうで修行してくる。

月影 ああ。

緋炎、何かを追うように下手へ去る。緋炎が去るのを見送る二人。月影、青十郎を見る。

青十郎

何だ？

月影 いや、いいこと言うもんだと思ってな。兄貴分の俺より兄貴らしい。

青十郎 ……こつ見えても5人兄弟の長男だ。

月影 それは初耳だな。

青十郎 初めて口にした。

月影 そうか、五人兄弟か……。

青十郎 何か言いたそうだな。

月影 別に。ただ、

月・青 一人息子のワガママ育ちの方がピンとくる

青十郎 とでも言いたそうだな。

月影 ……よくわかつてるじゃないか。

青十郎 貴様と話していると調子が狂う。

月影 腹減ったな。楓殿に何か作ってもらおう。

青十郎 そうだな。

月影 じゃ、行くか。

青十郎 待て。

月影 ん？

青十郎 飯は手を洗ってからだ。

月影 ……アンタは真面目だねえ……。

二人、上手へ去る。衣伏、下手より入ってくる。周りを気にしながら上手へ移動。衣伏が去り終わってから後を追いかけるように緋炎が入ってくる。

緋炎
アイツ……何でこんな所にいるんだ？

緋炎、衣伏の後を追ひ、上手へ。衣伏、上手から下手へ。続いて緋炎が上手から入ってくる。

緋炎
このまま上手く行けばあの男の居場所が分かるかも……。

下手へ行こうとした時、衣伏が現れる。

衣伏
ここまでついて来てしまったの……。気付かなかった私にも責任はある。見逃してあげるから早く帰りなさい。

緋炎
見逃す!?俺だってアンタぐらいなら倒せるんだ!

衣伏
私はね。でも、もうすぐあの人がここへ来てしまう。

緋炎
あの人？

衣伏
早く帰りなさい!

緋炎 俺は騙されないぞ！あの男の居場所を知られたくないんだろ！姫様を殺そうとした奴が何で俺

を助けるんだよ！

衣伏 今それを説明してる時間はないんだ。今すぐ帰りなさい！

緋炎 姫様の命を狙ってる奴を目の前にして帰れるわけないだろ！

衣伏 早く！！

下手から紅葉の声。

紅葉 衣伏！

下手から紅葉が入ってくる。その周りに影が5〜6人。

紅葉 戻ったのか。(緋炎を見て)……そいつは……。つけられたか？

緋炎 お前！

紅葉 まだ逃げていなかったのか。明日でもう30日目だぞ。

緋炎、刀を抜く。

紅葉

そんなに救いが必要か。……お前達。

影達が緋炎を囲む。

緋炎

クソツ！負けねえぞ！俺だつて……俺だつて役に立つんだ！！

影が一斉に襲い掛かる。刀で受けなんとかやり過ぎす緋炎。しかし、刀を支える度に少しずつ斬られていく緋炎。

片腕を斬られ、足を斬られ、ボロボロになりながらも戦う。

一呼吸ついて、大声と共に影達を斬りさいていく。(斬られても影は去らない)

走り切った先に紅葉がいる。緋炎、ゆっくり刀を振り上げる。

振りおろそうとした時に紅葉、一閃。緋炎を斬る。ひざまづく緋炎。

それでも刀を振り下ろそうとする。紅葉、緋炎の体を蹴り飛ばす。仰向けに倒れる緋炎。

紅葉、近付いて止めを刺そうとする。

衣伏

紅葉……後始末は私がやっておく。

紅葉、衣伏を見て、緋炎を見て、刀を納める。

紅葉
衣伏
紅葉

それで、綾姫はまだ封印の間から出てきてないんだな？
ええ。

やはり明日か……。御苦労だった。

紅葉、影と一緒に下手へ去る。衣伏、緋炎に近付く。

緋炎
チクシヨウ……。手も足も出なかった……。

衣伏
だから早く帰りなさいって言ったろ!!?

緋炎
俺……。死ぬのかな。

衣伏
今、止血してあげる。でも手当てをしたとしても……。分からないね。

緋炎
何だよ。

衣伏
え？

緋炎
アンタ、そんなに優しいのになんで姫様を殺そうとしたんだよ。

衣伏
人にはね、立場や事情ってのがあるのさ。

衣伏、簡単な止血をして、緋炎を起す。

衣伏 私にできることなんて限られてるけど……一つだけ願いを聞いてあげる。

緋炎 願いを？

衣伏 あるかい？

緋炎 会いたい……。俺……兄者に会いたい……。

衣伏 分かった……。でも、あの場所からずいぶん離れてしまったからね……。頑張るんだよ。

衣伏、緋炎に肩を貸し、上手へ移動。明かり少し暗くなる。

上手から月影と青十郎の緋炎を呼ぶ声。二人、上手から入ってくる。

月影 つたく、アイツどこに行っちゃまったんだ。

青十郎 怪我などしてないといいがな。

月影 青十郎が悟してくれたんだ。無茶なこととはしてないと思う。

青十郎 だいたい……若さつてのは怖いからな。己の力を過信して突っ走ってしまうことがある。

月影 経験談か？

青十郎 ああ……貴様にもあるだろ？

月影 ……まあ、な。

青十郎 さて、このままではラチがあかな。俺は向こうの方を見てくる。

青十郎、上手へ去りかける。

月影

待て。……誰か来る。

下手より衣伏と緋炎が入ってくる。

月影

緋炎！

月影、緋炎に走り寄り、抱き寄せる。座り込む緋炎。グツタリしている、青十郎も駆け寄る。

緋炎

兄者、心配掛けてゴメン。

月影

お前、どうしたんだ！？

緋炎

役に立ちたかったんだ……。少しでも。

月影

アイツに斬られたのか。

緋炎

俺じゃどうしようもなかった……。当り前だよな。……俺は兄者達ほど強くないもんな……。

月影

馬鹿野郎！！お前は才能があるんだよ！俺なんかより強くなるんだよ！ずっとずっと強くなるん

だよ！

緋炎

嬉しいな。兄者がそんなこと言うなんて。

月影 待つてろ、今楓殿を呼んでくる。すぐに手当てしてやるからな。

青十郎 月影、居てやれ。間に合わん。

月影 だが!!

青十郎 居てやれ!……貴様も分かっているはずだ。

月影 緋炎……。

緋炎 青十郎様、お願いが。

青十郎 言ってみろ。

緋炎 兄者のこと頼みます。助けてやってください。どうかお願いします。

青十郎 ……俺のできる範囲で良いというなら約束してやる。

緋炎 できる範囲」で、ですか？

青十郎 ああ。

緋炎 なら安心です。……青十郎様の「出来る範囲」は命がけですから。

月影 人の心配してる場合かよ!お前は?お前は何をしてほしい!?

緋炎 俺の願いは聞いてもらったから、もう十分だ……。

緋炎、大きいため息をついて。

緋炎 兄者……心配かけて、コメンよ。

緋炎ゆっくり目を閉じる。

月影

緋炎……。

月影、静かに緋炎の名を呼び、優しく髪を撫でてやる。

月影

痛かったら……。苦しかったら？よく頑張ったな。よく頑張った。……お前が俺より先に死ぬなんてな……。馬鹿野郎が……。

青十郎

月影。仮にでも早く吊つてやれ。緋炎は緋炎なりの役目を果たした。俺が姫に掛け合つて正式には城で吊つてもらおうようにする。

月影

……いや、気持ちはありがたいが、ここでいい。緋炎は城にも里にも連れて行かない。自由な、ここにさせてやりたい。

青十郎

そうか。

月影

青十郎。

青十郎

何だ？

月影

ありがとう。

青十郎

……緋炎はいい奴だった。あの明るさに何度も救われた。

月影

俺の自慢の弟だったからな。

月影、緋炎の体を抱き上げ、上手に去っていく。

衣伏、緋炎を見送り、姿が見えなくなると、振り返り、下手へ去ろうとする。

青十郎

待て。

立ち止まる衣伏。

青十郎

緋炎の願いは死ぬ前に月影と会うことか？

衣伏

ええ。

青十郎

なぜ貴様が？貴様は一体何がしたいんだ。

衣伏

……私は。

青十郎

暗殺の時も躊躇したり緋炎の願いを叶えてやったり。いい奴なのかと思えば、人間を滅ぼそうとしている男の味方だったり、何を考えているのかサツパリ分からん。本来なら、俺は貴様を斬らなければならぬ。だが、貴様に対して刀を向けるのは間違っている気がしてな。

衣伏

お前にはわからんさ。

青十郎

そりゃ分らないだろ。何も話さないなら。……悩んでいるってことか？貴様、本当はこんなことし

たかないんじゃないのか？

衣伏 私の気持ちなど意味はない。……あの日、あの時から私は紅葉の望みを叶える為だけに存在している。

青十郎 自分の考えも無しに他人の為に生きるのか!? 操り人形か貴様は!?

衣伏 ……苦しまなくていい分、人形の方がマシかもね。

青十郎 そんな考えは死んでも同然だ!

衣伏 そう……その通り。私は死んでるのさ。私は心臓が動いていない。紅葉が魂だけこの肉体に留まるよう願ってくれたんだ。

青十郎 何を言ってる……。

衣伏 弱い立場の人間の話さ。方法は間違っているのかもしれないけど、紅葉は今も人々を救いたいと思っている。お前達には理解できない。絶対。

青十郎 貴様達は敵だ。姫を狙っているなら相手をせねばならん。だが……このままでは気が入らないのも事実。教えてくれ。……何があつた? 貴様は何を背負ってここにいる?

衣伏、しばらく考えた後、語りだす。

衣伏 私達がいた村はね、三葉の国から南に10日ほど行った所にあつた。戦の絶えない国でね、それに

伴い年貢の徴収も厳しかった。当然、民の生活はいつもギリギリ。それでも農地を持っている家は

何とかなつたけど、土地を借りてる家はともしやないが生きられなかった。そして、そういう家は少なくなかった。

青十郎　　そんなの死を待つばかりだろ。

衣伏　　それを変えてくれたのが紅葉だった。紅葉も裕福な家に生まれたわけじゃない。でも、貧しい人の為に自ら家を出て、新しい村を作ったの。

青十郎　　新しい村を？

衣伏　　国の目を逃れてね。だから年貢もない。でも生活が楽になったというわけじゃない。一から畑を耕さなくてはならなかったから。

青十郎　　村人はどうやって集めたんだ？

衣伏　　紅葉が国中を回って本当に苦しい人々だけに声をかけて集めた。私も声をかけてもらった一人。10組の家族。総勢25人が最初の村人だった。

照明切り替え。影が下手から入ってくる。

影1　　紅葉様！こっちです。

下手から紅葉が入ってくる。

紅葉 紅葉様と呼ぶのはやめて下さいと言ってるじゃないですか。私はそんなに大層な人間じゃありません。

影2 何をおっしゃいます。紅葉様が村を作り、私たちに声をかけてくださらなかつたら、当の昔に死んでいたんです。紅葉様は立派なお方です。

紅葉 本当にやめてください。そんな風に思われていたら、私は皆さんとどう接すればいいのか分かりません。

影3 いーえ、紅葉様、そこは慣れてください。

影1 それよりどうです？この場所。広さ、土質。新しい畑にちょうど良くないですか？

紅葉 そうですね……問題は水源ですか……。

影2 あ、それなら大丈夫です。このちよつと行つた先に川がありましたから。

影3 紅葉様、私が見つけたんですよ、私が！

紅葉 へえ。こんな所に川があつたんですか。

影2 手の空いてる時にこのあたりの地図を作っておこうって衣伏さんが言ったんです。それで皆でちよつと見て回っていたら発見したんです。

紅葉 衣伏さんが？

影3 あ、もちろんそんなに遠くに行かないようにって注意されましたよ？

紅葉 そうですか……。

影1 で、どうですか紅葉様、ここに新しい畑を！

紅葉

……そうですね、また明日から忙しくなりそうです。

影達喜ぶ。衣伏も中に入ってくる。

紅葉

衣伏さん。

衣伏

紅葉様、こちらにいらしたんですか。

紅葉

衣伏さんまで、様はやめてくださいって言ってるのに。

衣伏

そういうわけにはいきません。村の皆で決めたことなんですから。

紅葉

私の知らない間にそんな話し合いをして……。何だかのけ者にされた気分です。

衣伏

そんな。

紅葉

……と、いうのは冗談ですが、やはり慣れそうもありません。

影1

紅葉様。じゃ、自分たちは先に戻って明日の準備をしておきますね。

紅葉

私も後で行きます。

影2

いーんです。紅葉様はもっとゆっくりしてきても。

紅葉

え？

影2

さ、行きましょ。

影3

え？何？どつどついついついっ

影2

いーの、アンタは分かんなくても。

影3
影1

何それ、失礼じゃない？

はいはい、行った行った。後で説明してあげるから。

影達下手へ去って行く。途端に気まぜくなる二人。

紅葉

……そういえば。

衣伏

はい。

紅葉

衣伏さんの提案で地図を作ろうって。

衣伏

あ、はい。土地の有効活用の為にも、村の安全の為にも、必要かなと思ひまして……。余計なことでしたか？

紅葉

いえいえ、素晴らしい提案だと思います。遠くまで行くなどの注意も合わせて頂いたようですし。

衣伏

どこで誰と出くわすか分かりませんがね。私達の存在を国に知られるわけにはいきません。

紅葉

そうですね。……衣伏さんはとても聡明な方だ。考えなしに行動してしまう私とは違う。

衣伏

何をおっしゃいます！私は！私ではとても村を作るなど……行動はおろか、考えもつきませんでした。

紅葉

私達は互いの足りないところを補い合えるのかもしれないですね。

衣伏

そうだと嬉しいですけど。

間。

衣伏

あの、紅葉様。

紅葉

はい。

衣伏

紅葉様は今後、この村をどうしていきたいとお考えですか？

紅葉

どうと言われても困りますね……。人にはそれぞれ器というものがあると思っています。私の器で

はこの村を作るのが手いっぱいです。人の数はもう10人ほど増えても大丈夫だと思えますが…

…その人たちの生活を守ってければと考えています。

衣伏

ずっとこのまま平和に過す？

紅葉

それ以上の幸せがあるとは思えませんから。

衣伏

そうですね。……あの、紅葉様！私も微力ながら、そのお手伝いをしたいと思っています。

紅葉

微力だなんて……衣伏さんがいるなら心強いです。どうかこれからも力を貸して下さい。

衣伏

はい。

返事後、2人再び気まぜくなる。

紅葉

では、私は先に村へ帰ります。明日の準備をしないと。

衣伏

そうですね。私も後で寄らせてもらいます。

紅葉、下手へ去っていく。

衣伏
それから一年後、私たちは祝言を上げた。

青十郎
夫婦だったのか……。

衣伏
村の人からも祝福してもらってね。笑顔が絶えなくて……。貧しいながらも楽しい日々だった。私の人生の中で一番最高の時間だった。本当にね、幸せすぎて怖いくらいだった。私にとって大切な人が、私を大切にしてくれたのだから。

影達、下手から入ってくる。楽しそうに笑いながら、

影2
衣伏さん!! おめでとうございます!!

影3
もう! 主役の二人がいなくなるなんて。せつかくのおめでたい席なのに!!

衣伏
私はちよっと呑み過ぎてしまつて、風に当たってたんです。……二人?

影2
紅葉様もいなくなっちゃいました。

影3
皆にさうとう呑ませられてましたからね。川で頭を冷やしてくるそうです。もうすぐ戻るんじゃないですか?

影2
この村が出来て最初の夫婦誕生ですからね。まして、それが衣伏さんと紅葉様なら皆大喜びで

すよ。

なんだか恥ずかしいですけどね。

影3 あゝ、衣伏さんが照れてる。可愛いー!!

衣伏 からかわないでください!!

影2 あ、紅葉様が戻ってきた!!紅葉様、こつちです!!

紅葉、入ってくる。頭を押さえて辛そう。

紅葉 皆さんも涼みに来たんですか？

影3 涼みに来たんじゃないかと探しに来たんです。宴の席から主役がいなくなるなんて聞いたことないですよ。

紅葉 さすがに呑み過ぎてしまいました。あんなに呑んだのは初めてです。

衣伏 大丈夫ですか？

紅葉 ええ。川へ行つて少しスッキリしました。

影3 えー!?夫婦になったのにまだそんな他人行儀な話し方してるんですか？

影2 そうですよ!!もつとこう、大人な二人の関係つてやつにならないと!!

衣伏 からかわないでください!!

影1 そうだぞ。お前達。お二人にはお二人なりの近付き方というのがあった。それに、これ以上か

らかつて衣伏さんを怒らせたなら誰も手が付けられなくなる。

え？私そんなに怖いですか？

はい。

そんなあ……。

衣伏 ありがとうございます。まさか元神主だなんて……。知りませんでしたよ。

紅葉様とお会いしたのは辞めた後でしたから……。久し振りに袖を通しました。

影1 おかげ様で一生の思い出ができました。本当にありがとうございます。

衣伏 お礼を言うのはこちらの方です。最後に良い思いをさせていただきました。

影1 最後？

衣伏 はい。と言っても、まだかなり先の話ですが……。私は来年の春にはこの村を出ようと思います。

影2 え！？何故ですか！？

影3 この村が嫌いになったの！？

影1 逆ですよ。この村が好きだから出るんです。

影3 どういうこと？

影1 この村だけではどうしても用意できないものがたくさんあります。薬や塩 新しい布なんかも手

影2 に入れにくい。私は旅に出て、それらの物を手に入れて戻ってこようと思います。

影2 でも危険じゃありませんか？

影1 この服さえ着ていれば、多少のこととは「まかせ」でしよう。

衣伏

僧衣をそのようなことに利用するのは教えに反するものではありませんか？

影1

ですから最後なのです。仏に仕える者として胸を張れる最後の仕事で、二人のご結婚であったことは私に何の悔いも残しません。

紅葉

しかし、それでは……。

影1

紅葉様がくれたものです。

紅葉

え？

影1

紅葉様がこの気持ちくれたのです。私も私の家族も皆、紅葉様に感謝しています。紅葉様のようにはやれないかもしれませんが、この村のために精一杯頑張るつもりです。

紅葉、影1に近付き、かたく握手をする。

紅葉

必ず帰ってきてください。

影1

はい。……と言っても、本当にまだ先の話ですけど。

紅葉

いえ、そのようなことを考えてくれる人がこの村にいたことが心強いのです。

影1

村を出てから戻ってくるまでの間、楽しみなこともあるんです。

紅葉

それは？

影1

戻ってきた時に、この村人の数が増えていることです。衣伏さん。

衣伏

はい。

影1 子供、頑張つて産んでくださいね。

衣伏 はい!?

影1 でも衣伏さんが頑張る前に紅葉様が頑張らないとか!!

影2 下品ですよ!!

影3 えー何、何?紅葉様、何を頑張るの?

影2 ーの、アంతは分からなくても。

影3 何それ、失礼じゃない?!

影1 さ、これから頑張らなくちゃならない男がこれしきの酒に酔ってる場合じゃありませんよ?今日

は朝まで呑み明かしましょう!!

紅葉 え?いや、本当にもうこれ以上は……!!

紅葉、影達に連れていかれる。

衣伏

夏が過ぎ秋が来て。秋が過ぎ冬が来て……。ほんの小さな、些細なことでも大声で笑うことができた。紅葉は変わらずずっと優しく……。こんな日々が永遠に続くと思っていた。でも……年が明けて間もない頃、あの悲劇が起きた。

影達と紅葉が入ってくる。

紅葉 衣伏。こんな所にいたのか。

衣伏 もう行くの？

紅葉 相手を待たせるわけにはいかないからな。

衣伏 でも紅葉。今までこんなことなかったでしょ？

影1 そうですよ。この村のことはこの国では知られていません。なのに村に入りたいたいから責任者と
会わせてくれたって……。

紅葉 話によると数年前の我々のような状態らしいです。

影2 だから怪しいんですよ。そんな人達がどうやってこの村のことを知ることができると言っ
つんですか。

影3 紅葉様、やめた方がいいですって。どんな人達なのかもわからないのに。

影1 せつかく今の村の人たちはみんないい人で仲良くやってるんですよ。

紅葉 はい。ですから話をしてみて我々と合わないようでしたら村に入ることを断るつもりです。

衣伏 断った場合、腹いせにこの村のことを国にばらされるかも。

影2 ……そうだな。言い方には気を付ける。なるべく向こうの機嫌を損ねないようにしないと
な。紅葉様がそんなに気を遣うこともないのに。

紅葉 本当に困っている人達かもしれないよ？明日どこるか、今、食べるものもなくて苦しんでいる
人達かもしれない。それに、いきなり村に入ってくるのではなく、村の外で会い、話し合いをし
ようとする姿勢にも好感が持てると思いませんか？

影3

それはそうかもしれませんが……。

紅葉

とにかく、行って話をしてみます。憶測だけでは前へ進みませんから。

衣伏

気をつけて。

紅葉、うなずいて上手へ去っていく。

衣伏

指定された場所は村から歩いて3時間ほど離れた山奥。でも、紅葉が到着してもそこには誰もいなかった。

青十郎

……畏だったというわけか。

衣伏

村に入りたいと話を持ちかけてきたのは国の使いのものだった。私たちの村の存在が国にばれたの。税を逃れて勝手に村を作っていたことに君主は怒った。そして、もつとも残酷な方法で罰を与えた。

青十郎

貧欲な君主の考えそんなことだな。

衣伏

まず城の兵士が大勢攻めてきて、家と畑を燃やした。そして、行き場をなくした村人が呆然と立ち尽くしている中、一家族につき一人を残し殺していった。

青十郎

皆殺しではなく？

衣伏

言ったでしょう？残酷な罰だって。……ある家族は夫だけが生き残り、ある家族は妻だけが息子だけが、娘だけが生き残った。そして、兵士は帰って行った。

青十郎

分からん。一人生かすことに何の意味が。

衣伏

住む家を失くし、明日の糧を失くし、家族を失った……。どうやって生き続ける希望を持てばいい？そんな状態で前を向けるほど、人は強くない。だから自ら死のうとする。でも、一つだけ心に引つかかるものがある。……なぜ自分がこんな目に会わなきゃいけないのか。……何で自分だけがこんな不幸なのか。何で自分だけ苦しまなければならぬのか。……その原因を作ったのは誰？この村を作ったのは誰？って。

青十郎

まさか！？

衣伏

そう、生き残った者は紅葉を恨む。紅葉にも同じ目に合わせようと考え。大切な人を奪われる悲しみを、苦しみを与えてやろうと考える。私は生き残った村人に囲まれ、紅葉が戻ってくる数時間の間、拷問を受け続けた。

影達、衣伏を取り囲み、拷問をかける。殴る蹴るなどの暴力。音楽。紅葉上手から入ってくる。

紅葉

衣伏！！

紅葉の姿を見た影達は影1だけを残して紅葉の方へ。

大声をあげて迫る影達。紅葉、行く手を遮られる。

グツタリしている衣伏。影1、衣伏に暴力を続ける。

紅葉

衣伏!!衣伏!!

前へ進めない紅葉。しばらく影と押し合い。体勢を崩し、前のめりに倒れる紅葉。

影達に押さえつけられる。暴力を続けていた影1一旦止める。ゆっくり剣を取り出し刀を抜く。

衣伏、起き上がり、紅葉のもとへ行くこととする。

影1に背中を見せる衣伏。影1、刀を振り上げる。

衣伏

紅葉……。

やめろ!やめてくれ!やめてくれ!私が悪かった!悪いのは私だ!!全部私が悪いんだ!!罰は私が受ける!!だからやめてくれ!!

紅葉

影1、刀を振り下ろし、衣伏を斬る。ゆっくり倒れる衣伏。

倒れた衣伏に向かってさらに刀を突こうとする影1。

紅葉

やめてくれ!私がもう一度イチから全部やる!畑も一人で耕す!皆は何もすることない!私一人でやるから!やめてくれ!悪いのは私なんだ!衣伏は!衣伏だけは!!

影1、刀を大きく振り上げる。

紅葉

やめろー!!

影1、刀を衣伏に突き立てる。一度目は大きく。以降、数回、細かく刀を突き立てる。

動かなくなる衣伏。奇声を上げる影1。その声に反応して他の影達も奇声をあげ、紅葉を殴る、蹴るなどして暴力を加える。動かなくなる紅葉。影達、一度大きく雄たけびをあげて下手に去っていく。紅葉、上半身だけ起こして這うように衣伏のもとへ。

紅葉

衣伏……衣伏。

衣伏の体を抱き抱え、うづくまる紅葉。

紅葉

地獄だ……。この世は地獄だ。……人間は弱い。……弱い人間は過ちを繰り返す。……過ちを犯したのは国か？村人か？それとも私なのか……。

紅葉、衣伏の髪を優しく撫でてやるが、その動きを止めて

紅葉　　違う。……私は過ちなど犯していない。人間の罪が重すぎるのだ。今までのようなやり方では人を救えはしない。……この世は地獄。ならば、死こそ人間にとっての救いとなるだろう。

紅葉、衣伏の体を床に下ろし。

紅葉　　力が……力が欲しい。全ての人間を殺し救える力が欲しい！我に力を！我に力を！我に力を！！

爆発音、紅葉、目の前の一点を見つめる。

紅葉　　……お前は誰だ？あやかしか？……私の願いを3つ叶えるだと？……3つもいらぬ。2つで十分だ。

紅葉、立ち上がり。

紅葉　　我に力を与えてくれ。全てのものを破壊できる、圧倒的な力を。人を辞めても構わぬ。我に絶対的な破壊の力を与えてくれ。

力が集中する音。紅葉、自分の体を確かめる。手ごたえを感じたのか、再び前を向く。

紅葉
二つ目の願いだ。衣伏を生き返らせてくれ。

間

紅葉
魂だけ？……構わん。衣伏がこの世に留まれるならどんな方法でもいい。

力が集中する音。ゆっくり立ち上がる衣伏。

紅葉
衣伏、前に誓ったな？これからも我に力を貸すと。

衣伏
ええ。
我はこれより全ての人間を殺し、救う方法を探す。衣伏にも動いてもらうぞ。

紅葉、衣伏の返事を聞くことなく下手へ去る。

明かりが変化する。青十郎と衣伏。

青十郎
貴様達の事情は良く分かった。同情の余地は充分にあるだろう。だが、やはりやろうとしている

ことは間違っている。

衣伏 何が正しくて何が間違っているかは立場によって変わるものでしょう？

青十郎 貴様の立場はどうなんだ。

衣伏 ……分らない。

青十郎 分らない？

衣伏 私は紅葉のように全ての人間を救いたいなんて思わない。私は、紅葉が救われてくれればそれでいい。

青十郎 奴にとつての救いは……せめて人として死なせてやることじゃないのか？

衣伏 私達は仇じゃないの？さつきの男にとつて。

青十郎 話のわからない男じゃない。説得するっていうなら俺達も力を貸してやるが？

衣伏 私達はもう後戻りできない。これまでも人を殺し過ぎた。心はとくに人じゃなくなっている。

青十郎 心が人じゃないというなら何故そんなに辛そうな顔をする！！

衣伏、一瞬何かを考え、言おうとするが止め、下手へ去ろうとする。

青十郎 俺は俺の信念を貫く。姫を守る為であり、優しい心を持つが故に狂ってしまった男を救う為にな。

衣伏 話を聞いてもらえて良かった。私の罪の何割かはアンタが背負うんだ。

青十郎 問題ない。

衣伏 ……私は、私のケジメをつけるとしよう。

衣伏、下手へ去っていく。照明が切り替わり、朝になる。伸びをする青十郎。大きく溜め息。

青十郎 30日目か……。

刀の交わる音。反応する青十郎。

青十郎 斬撃の音!?! ……月影!!

青十郎、上手へ走り去る。上手から月影が入ってくる。

月影 緋炎……。ここなら封印の間も近いし、見晴らしもいいし……寂しくないよな。

月影、大きく溜め息。

月影 こんなことなら、もっとお前と遊んでおけば良かったな。大したこととしてやれてないのに、兄者、

兄者って……。実は結構嬉しかったんだ。……本当の弟だと思ってたんだ……。でも、あいつと刀

を交えるのはお前の仇打ちじゃない。お前もあいつと刀を交えたなら分かるだろ？あいつの刀からは怒りや憎しみは感じられない。感じるのは……悲しみだけだ。

月影、大きく溜め息。

月影

じゃ、俺は俺のすべきことがあるから。……大丈夫。覚悟は出来ている。

影達が下手より入ってきて、月影を囲む。

月影

居るべき場所へ帰してやるよ。

月影、刀を抜く。

月影

始めようか。

影達、襲いかかる。影の刀を避ける月影。まずは守りに徹する。

影を徐々に誘導し、上手へ集める。下手で刀を構え直す月影。影達と相對する。

月影、掛け声とともに上手へ移動。影達を一気に斬る。斬られた影達は下手へ去っていく。

どんよりとしたイメージの効果音。

影達とすれ違いながら紅葉登場。一気に月影に走り寄り攻撃。かろうじて受けるが態勢を崩す。下手へ回りこもうとするが、移動中、左腕を浅く斬られる。腕を押さえる月影。下手へ移動するが片膝をつく。

紅葉振り返り、月影に向かって歩く。

青十郎、掛け声とともに刀を振り下ろしながら上手より登場。

数回斬り合いをし、距離をとる青十郎。

青十郎

月影!! 大丈夫か!?

月影

登場が格好良すぎるだろ。見計らってたんじゃないのか?

青十郎

それだけ軽口がたたければ平気だな。

紅葉

あれだけ力の差を見せつけられて、まだ私の邪魔をするつもりか。

月影

立場や事情、信念があるのはあんただけじゃない。

青十郎

俺達の力は貴様のように何かにすがって手に入れた力ではない。自らの意志と努力で手に入れた

ものだ。

月影

弱い人間だってな……強くなれるんだよ。変わりたいと願ひ続けければな!!

月影・青十郎・紅葉の斬り合い。以前よりは善戦。2撃目、3撃目に耐えられるようになってくる

少し間を置き態勢を整える3人。紅葉、気合いを入れて破壊の力」発動。再び斬り合い。要所要所で破壊の力」を使う紅葉。最終的に二人の刀を大きくはじき、青十郎↓月影の順で破壊の力」を使う紅葉。青十郎、大ダメージ。
紅葉をセンターに青十郎は上手。月影は下手へはじき飛ばされる。

紅葉
月影

なるほど……確かに強くなつてはいる……が、その程度で我を止められると思つたか？
焦るなよ。今からとつておきを見せてやる。

月影、鉢巻きに手をかける。

青十郎

待て月影!!俺が先に血吸丸を抜く!!

月影

いや、順番的には俺が先だな。

青十郎

俺は血を取られるだけだ!!代償が少ない!!

月影

戦いが長引いたら分からねえじゃねえか!!

青十郎

覚悟はあると言つたら!!

月影

バカ野郎!!武士の本分を忘れたのか!?青十郎に何かあつたら誰が姫さんを守り続ける!?

紅葉

言い争いはあの世でするんだな。

紅葉、青十郎へ斬りかかる。必死に対応するため血吸丸を抜くことができない。

月影

俺に流れる鬼の血よ!! 力を貸しやがれ!!

月影、鉢巻きを取る。力が集中する効果音。

月影、刀を構え直して、掛け声とともに紅葉に斬りかかる。

紅葉、月影の刀を受け止めるが、飛ばされそうになる。

紅葉

この力は!?

月影

言っただろ? とつておきを見せてやるって。

3人の斬り合い。月影と紅葉は互角の力。青十郎のみ少ないながらもダメージを受けていく。

青十郎、紅葉から「破壊の力」を受け態勢を崩す。止めを刺されそうになった時、月影が青十郎をかばい、二人、上手へ飛ばされる。その際、月影は右腕を斬られる。うめき声をあげる月影。

青十郎

月影!!

月影

大丈夫。少しかすただけだ。

紅葉

さあ、救われるがいい!!

紅葉、月影に斬りかかるが、青十郎が前へ出て血吸丸の鞘で攻撃を受け止める。大きく刀を弾き返す青十郎。飛ばされる紅葉。

月影
青十郎!!

青十郎
貴様にばかり良い格好させるわけにはいかんだろ。

月影
武士としての役目はどうする!!

青十郎
武士としてではない。俺だ……。俺自身が貴様を助けたいと思ってるんだ。

月影
…アンタ、変わったな。

青十郎
ふざけるな!! 貴様が!! 貴様が俺を変えたんだろ!!

青十郎、台詞と共に血吸丸を抜く。力が集中する音(少しおどろおどろしい音)。

苦痛に顔をゆがめる青十郎。その間に態勢を整える月影。紅葉に斬りかかる。避ける紅葉。

月影そのまま下手へ。青十郎、上段から振り下ろす。受ける紅葉。弾き返すことができない。

そのスキについて斬りかかる月影。紅葉、身を半転させてやり過ごす。月影、上手へ。青十郎下手へ。斬り合い再開。3人が互いに少しずつダメージを追う。

最終的に月影は下手。紅葉はセンター。青十郎は上手。互いに上段を振り下ろす。

3つの刀が交わり合う。

青十郎 貴様の信念の貫き方は嫌いではない。裏切られ、大切な人を殺されて尚、人の為と言える貴様の

心根だけは認めよう!!

月影 アンタの刀からは怒りも憎しみも伝わってこない。感じられるのは深い悲しみだけだ!!

青十郎 その悲しみの源は何だ!? 無力さか!? 村人を説得できなかったこと、大切な人を守ることができ

なかった無力さか!?

月影 弱者にとつて死こそ救いと言つてたな!! それはアンタ自身が望む、自らへの罰だろう!!

紅葉 戯れ言を言つたな……。弱者の気持ちに貴様等に分かるというのか?

月影 皮肉なもんでな。弱者の気持ちはアンタが教えてくれたよ!!

青十郎 だからこそ俺達は強くなろうと思つた!! 痛みや苦しみを飲みこんで、さらに前へ進もうと思つた

のだ!!

月影 死からは何も生まれぬ。俺達は生きてるんだ!! 生きてりゃ辛いことの1つや2つあるだろう、

だがな、辛いことだけじゃない。嬉しいことや楽しいことだつていっぱいある!!

可能性を潰して前を見なくなった貴様に俺達が負けるわけがないだろう!!

青十郎 3人、半周して離れる。上手に紅葉。下手に月影と青十郎。

相対し、3人再度構える。3人の雄叫び。上手より衣伏登場。

衣伏、紅葉の背中を見て歩み寄る。

衣伏

紅葉

衣伏

紅葉

衣伏

紅葉

衣伏

紅葉

衣伏

紅葉。

衣伏か。……油断するな、以前のこの者達ではないぞ。

何故、その人達を殺さないといけないのです？

……何？

その人達を殺した後は、誰を殺すのですか？

決まっているだろう。綾姫を殺し地獄門を開くのだ。

そして死者がこの世に蘇り、生きている者に取り憑き……

人間は死に絶え、救われる。……今更どうした。

その救いは誰のものですか？……紅葉は人が死んだ先を知らない。なのにそれがどうして救いと

言い切れるのですか？

人間は生きている事自体が罪！ならば死を持って償うしかあるまい？

償い？……救いではなく？

紅葉

衣伏

お前は何も考えなくていい。俺との誓いを忘れたのか。

覚えています。覚えていからこそ、今の紅葉を見ているのがつらい。……自らの矛盾から目をそ

らしている紅葉を見るのがつらいのです。

紅葉

衣伏

……矛盾だと？

紅葉、私は……感謝しています。今は魂だけの存在だけど、こうして今も紅葉と話が出る。何

より、魂だけでも側に居て欲しいと願ってくれた紅葉の気持ち私が私は嬉しい。でも……本当に死こそが救いだと考えているならどうして私をこの世に蘇らせたのですか？ 私は……救いの対象ではないのですか？

紅葉 ……死は……救いだ……。衣伏は……お前は……。

衣伏 死が救いと思っているなら、どうして死なせてくれなかったのですか。魂だけの私はどうすれば救われるのですか？

紅葉 ……そうか、お前は魂だけなのだな。

衣伏 ……え？

紅葉 衣伏、その身を盾にしヤツ等に向かうがいい。魂だけの身だ。刺されても斬られてもどうと「こ」とはあるまい。我はその隙にヤツ等を殺す。誓いを示せ……我に力を貸せ！

衣伏、紅葉の背中をジツと見た後、意を決して紅葉の背中を刺す。呆然とする紅葉。

衣伏 もう……、もうやめましよう。あなたは間違っています。村人を想い、私を大切にしてくれた紅葉に戻って欲しい。私の願いはそれだけです。

紅葉 弱き者を身捨てろと言っつのか？

衣伏 弱き者、強き者、それを決めるのは私達じゃない。分かるでしょう？それを決めるのは私達じゃない。

紅葉 救いはどうなる。どうすれば人は救われる？自分の力の及ばぬ圧力に対し、どうすれば人は救われる？

衣伏 紅葉……救いなんて言葉は幻でしかない。仮にあつたとしても、もつと身近で小さなもの。あなたと笑って共に生きていければ、それが私の救いなの。

紅葉 我が死ねば、衣伏も死ぬのだぞ？

衣伏 ええ、ですから……来世で会いましょう。

紅葉 ……魂だけで生きるのが辛くなつたか。

衣伏 え？

紅葉 あの世へ行き、生まれ変わりを待ち、一刻も早く普通の人間として生きたいと思つたか。

衣伏 違う。

紅葉 我が死ねば、その願いが叶うと思つたか！？

衣伏 違う！！

紅葉 この裏切り者がー！！

紅葉、袈裟斬りから横払いで衣伏を斬る。上手前方へ飛ばされて倒れる衣伏。動かなくなる。
紅葉、衣伏の方へ2・3歩ヨロヨロと歩くが、立ち止まる。

青十郎

貴様！！

月影
アンタは今、人であることをやめたんだ!!

紅葉、刺された所を押さえつつ、うなだれる。

耳障りな音。音とともに全身に激痛を受ける月影。月影の叫び声。

青十郎

月影!!お前!?

月影
大丈夫。今、鬼になるわけにはいかないからな。

紅葉
我は……誰だ。我は何だ?我は……分らない。

紅葉、ゆっくり振り返る。

紅葉
お前達を殺した後でゆっくり考えるところでしょうか。

月・青
ふざけたこと言っつてんじゃねえー!!

音楽。

青十郎
大切な者を巻き込むだけ巻き込んでおいて、最後はこれか!!信念はどうした!!目の前の女一

人を救えない者が、人々を救うなどと大それたことを言うな!!

月影

救いが必要なのはアンタの方だろう!!俺達が救ってやる。俺達の覚悟をのつけてアンタを斬る。さあ、ケリをつけようか!!

3人、最後の斬り合い。互いにダメージがあるため、うまく動けない。それでも必死に戦う3人。月影は鬼の力の痛みを耐えて。

青十郎は血吸丸からの呪いに耐えて。

紅葉は衣伏に負わされた傷をかばいながら。

途中、二手に分かれる。上手に紅葉。下手に月影と青十郎。

紅葉、傷を押さえて動けない。月影、痛みを耐えつつ、青十郎を見る。片膝をつく青十郎。

月影

青十郎!!血吸丸を離せ!!

青十郎

やかましい!!余計なお世話だ!!

心配する月影の体を使いながら、自らの力で立ち上がる青十郎。

青十郎

それより、いいか。このままじゃ勝ち負けは五分五分だ。俺がアイツの隙を作る。お前はその好機を逃さず斬れ。

月影

駄目だ、危険すぎる!!その役なら俺が!!

青十郎

身分の低い忍のクセして武士に意見するな!!……と、以前の俺なら言っていたんだろうな。

台詞終わりと同時に飛び出す青十郎。

月影

青十郎!!

月影、痛みに片膝をつく。青十郎と紅葉、数回斬り合いの後、鏢迫り合い。

そのまま立ち位置を逆に回り込む。

紅葉、上段に構え、振り下ろす。青十郎、血吸丸を離し、紅葉に斬られる。と、同時に紅葉の両腕を掴む。

青十郎

今だ月影!!

紅葉

離せ!!

紅葉、「破壊の力」を解放。飛ばされそうになる青十郎。

青十郎

月影!!

月影、立ち上がり紅葉を2回斬る。青十郎腕を離す。

振り返る紅葉。月影、最後にもう一度紅葉を斬る。センターで倒れる紅葉。

月影、よろめいて下手で座り込む。青十郎、這うようにして血吸丸を拾い、鞘に納め立ち上がり月影の元へ。

月影
終わったな。

青十郎
ああ……。……。これは？

青十郎、鉢巻きを手にする。

月影
残念ながら間に合いそうもない。

青十郎
……。そうか……。

月影
ああ。

青十郎
俺の田舎は……。三葉の国から北へ6日ほど行った所にある。寂れた村だが山が多くて景色のいい所だ。

月影
……。へえ。

青十郎
鍋がうまくてな……。今度、一緒に食おう。

月影
鬼を受け入れてくれる村だといいが……。いいぜ。いつにする？

青十郎 ……お前は真面目だな。男との約束なんて今度な」でいいんだ。

月影 ……違う。……じゃ、今度な。

青十郎 月影。

月影 ん？

音楽。

青十郎 一つ頼まれ事をしてくれないか。

月影 ……何だ？

青十郎 これを……姫に、三葉家に返しておいてくれないか。

月影 そんなのアンタが……。分かった。全く、世話のやける男だな。

青十郎 すまない。

月影 で、アンタはどうするんだ。

青十郎 俺は少し、暇をもらう。ここ最近、働きづくめだったからな。ここらで体を休めんともたん。

月影 そうだな。ゆっくり休むといい。

月影、体の痛みを耐える。

青十郎

……行ってくれ。貴様が鬼になるところなど見たくもない。

月影

ああ……。

月影、下手へ去りかけて、立ち止まり。

月影

青十郎。

青十郎

何だ。

月影

いろいろあつたが、楽しかったな。

青十郎

ああ、それだけは確かだ。

月影、下手へ去っていく。青十郎、その背中を見届ける。

最後の力を振り絞って立ち上がり、前を向く。

青十郎

武士とは使命を全うする為に生きる者なり!! 男とは信念を貫く為に生きる者なり!!……短くはあつたが良い人生だった。万感の思いを胸に笑ってゆこう。

青十郎、台詞の後、力尽きて倒れる。

照明が変わる。紅葉、上半身だけゆっくり起き上がる。

這つて衣伏の元へ。衣伏の頭を抱え、抱きしめる。

紅葉

……すまなかつた。間違っていたのは私だ。随分長い間、辛い思いをさせてしまったな……。すまなかつた。

紅葉、前を向いて

紅葉

3つの願いを叶えるあやかしよ。やはり3つ目の願いをさせてくれ。私は……来世でももう一度あなたに会いたい。今度こそ、今度こそ必ず幸せにするから。衣伏……あの世であなたも同じように願ってくれるだろうか？

紅葉、衣伏を抱えたまま力尽きる。

中幕が開き、綾姫が出てくる。上手から楓。

楓

姫様!!

綾姫

楓、他の者は!?

楓

緋炎様がお亡くなりにな

綾姫

緋炎が!?

楓

今、青十郎様と月影様があの方と戦っております。

綾姫

私の力は門を封じることしか出来ないのでしょうか。私は守ってもらおうことしか出来ないのでは

うか!?

楓

そのようなことをお考えになれる姫様だからこそ、あの方2人は命をかけることが出来るのです。

姫様は姫様のままでいい。私はそのように思います。

鬼になった月影が血吸丸を持って下手から入ってくる。

楓

あやかしです!! 姫様!! お気をつけてください!!

楓、綾姫の前に出て盾となる。月影、ゆっくり近付く。

綾姫

楓、待ちなさい。

綾姫、楓と並ぶように前へ出る。

楓

姫様、危のうごきます!!

綾姫

あれは……血吸丸では?

楓
え？……ああ！！

月影、相手が極力恐がらないように近づく。月影、綾姫に刀を渡す。

楓
ここに血吸丸があるということは、青十郎様は！！

綾姫
青十郎……。

綾姫、血吸丸を強く抱きしめる。見届けた月影、振り返り、下手へ去ろうとする。
ハッとされた表情を浮かべ、月影を見る綾姫。

綾姫
月影！？

月影、立ち止まる。

綾姫
……月影なのでしょう？

綾姫、一歩前へ出る。と、同時に一歩下がる月影。

綾姫

月影……。

月影、ゆつくり三葉家家臣の忠誠の姿勢を取る。

綾姫

ありがとう。月影。青十郎。私はあなた達のことを子・孫・その先の者へと代々語り続けていきたいと思います。あなた達の想い・信念はきつと多くの者たちが引き継ぐはずです。闇夜を照らす唯一の光。月光のような信念を。

全員ストップモーション。

親子の台詞(声)が入った後で照明、徐々に暗くなる(暗転ではなく薄明かり)。

娘

これでこの物語はおしまい。

娘

え、これでおしまいなの？

母

だから少し悲しいお話って言ったでしょ？

娘

悲し過ぎるよ。ねえ、お話なんだから、死んじやった人とか、鬼になっちゃた人とか、皆生き返ら

娘

せちやえばいいんじゃない？

母

ダメ。受け継いできた話を勝手に変えるわけにはいかないでしょ？

娘

え？

母 それにね、この物語はおしまいだけど、ずーっと先の世界では皆幸せになったんだって。

娘 ずーっと先の世界？

母 言っただでしょ？死んであの世に行っちゃっても、生まれ変わりってあるんだって。だから、その生

まれ変わった世界で。

娘 幸せになれたの？

母 長い時間を必要としたけどね。

娘 じゃあ、最後の言葉はもちろん……。

2人 めでたし、めでたし。

音楽。

明かりがつく。舞台上の全員が立ち上がる。袖にいる影も全員出てくる。

それぞれが楽しそうに笑い合う。

— 幕 —